

西川口 STORY

ver. 2



西川口と育つ

まちづくりインターンシップの学生がスキルを磨きながら、将来の西川口像づくりのシステム構築を学ぶ。空き家・空きビルなどの実態調査やデータベース作成を行った。インターン生の取り組む先には、若者の未来とまちの未来が重なる。



アート&クラフトな川口



江戸染型紙

西耕三郎 (西染色工房)



鋳物の文鎮

木村貴子 (ユニバース)



クランブルーローズ

山本宗省 (花好園)



さをり織り

さをり班 (わかゆり学園)

特集 住まいの仕事塾

- 44 住まいの仕事塾
アクティブ居住スタイルへ (早田 宰)
- 49 住まいの仕事塾に参加して (堀和 光二郎)
- 50 プロジェクトハウス
「栗原ハイツ発」の新まちづくり (千葉 俊介)
- 52 栗原ハイツで暮らし始めて (千葉 俊介)
- 53 学生が栗原ハイツを見学! (原田 明裕)
- 54 麦プロジェクト (江田 佳那子)
- 56 麦の種をまきに (松井 威)
- 57 川口B級グルメ大会に参加 (渡邊 恵理)

西川口 2010 ~ 2011

- 59 社長との交流会と
まちづくりインターンシップ (野口 琢生)
- 61 西川口バーチャル宝探しツアー (西川口ストーリー編集部)
- 62 トレジャーハント in 西川口 (鎬木 亜紗実)
- 64 一日映画ワークショップ (鎬木 亜紗実)
- 68 西地区フォーラム (齊藤 玲於奈)
- 70 川口の染織デザイン (早田 宰)
- 71 西川口西口夏祭り (加藤 裕樹)
- 72 川口B級グルメ大会 (西川口ストーリー編集部)
- 73 コミュニティ・サポート・スチューデント結成
(西川口ストーリー編集部)
- 74 彩の国黒豚/彩の国地鶏タマシャモ グルメラリー
(西川口ストーリー編集部)
- 75 西川口発! 焼焼売! (野口 琢生)
- 76 復活!! 懐かしの餃子ドッグ (野口 琢生)
- 77 グローバル弁当お披露目会 (石塚 高秋)
- 78 仁志二町会餅つき大会 (末永 太一)
- 79 新春餃子パーティー (西川口ストーリー)

あとかぎ

西川口と育つ**アート&クラフトな川口****コラム**

- 7 西川口の可能性 (大久保 昌俊)
- 10 協働でつくる西川口ストーリー (早田 宰)
- 15 西川口駅西口の飲食業の今後を考える
B級グルメをどう活かすか? (木村 裕美)
- 18 つながりの装置としてのイベント (沼田 真一)
- 20 まちはみんなで作るもの
第2回 - 2011年 - (橘 麻由)
- 22 鉄塔横町の記憶 (野口 琢生)

インタビュー

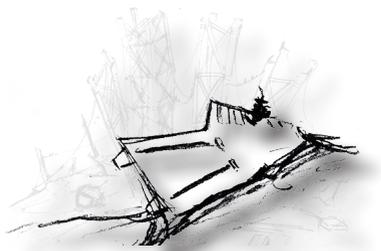
- 26 西川口に住む韓国人の暮らし (朴 成賢)
- 30 川口活性化の起爆剤となるか?
座談会「川口の麦味噌」(山崎 秀一)

東口のいま

- 32 青木町5丁目の緑化 (早田 宰)

海外のまちづくり

- 35 韓国における新しいまちづくりの変容 (朴 成賢)
- 40 イギリスの都市再生
- ショアディッチ地区の事例から (野口 琢生)



西川口の可能性

サブカルチャーのポテンシャルに絡めて

大久保昌俊（文筆家）

1982年にテレビで放送された『超時空要塞マクロス』（以下『マクロス』）というアニメを御存知だろうか？

このアニメは、地球に異星人が襲来してくるが、巨大戦艦マクロスが単独でそれら立ち向かっていく、というあらすじになっている。そして、『戦争』だけでなく男女の『恋愛』も大きな要素になっている。これだけ聞くと、どこにでもあるロボットアニメやSF小説と変わらないように見える。しかし、『マクロス』の大きな要素には、もうひとつ、アイドル歌手の『流行歌』、つまり『歌』がある。

このアイドルの『歌』という要素が大きな軸を形作っている点に、この作品の独自性があるわけだが、もう少し具体的に説明してみよう。

地球人が戦う異星人は、『戦い』のために生まれ、『戦争』に勝つために生きる人種である。戦闘技術・軍事規模の両面において、地球人をはるかに上回る。しかしこの異星人、もともとは地球人と同じルーツ

を持ち、男女の恋愛行為などの文化習慣を、（戦争や権力闘争に特化・適応させすぎた）進化の過程で、遥か昔に置き忘れてしまっている（ちなみに異星人の男と女は、完全に隔離され、いがみ合っている）。そのため、異星人たちは、地球人の恋愛行為（キス）を見せつけられた瞬間、途方もないカルチャーショックを受ける。さらに、戦艦マクロスが収容する民間人の中から選ばれた、女性アイドル歌手リン・ミンメイの歌に対して、衝撃と同時に快感すら覚える。

異星人の幹部は、こうした地球人の『文化』に危機感を受け、それに接触しないように部下に通達するが、アイドル歌手の歌と性的魅力にすでにとり憑かれてしまった多くの異星人を抑えつけることはできず、内部分裂が起き、崩壊に至る。

この作品のメカニックデザイン・脚本・演出を担当した河森正治は、「武力で決着しない作品をつくれなしかと考えたのが最初のマクロスです」（『ニュータイプ』



左 超時空要塞 SDF-1 MACROSS

http://w.livedoor.jp/harmony-gold_japan/lite/d/SDF-1%20%A5%DE%A5%AF%A5%ED%A5%B9

右 『超時空要塞マクロス』の女性アイドル歌手リン・ミンメイ

http://en.wikipedia.org/wiki/File:Ptcard_minmay.jpg

2002年9月号角川書店からの引用)と発言している。文明や権力や武力といったハードな側面だけでなく、感性や情感に訴えかけるソフトな側面を持った《文化》もまた、人間の根幹を形作っていることを、この作品は伝えている。むしろ、これからの21世紀、ハードなシステムやコンテンツよりも、ソフトなつながりや内容こそが大切であることを、我々に投げかけている。

『マクロス』を拡大解釈すれば、ジョセフ・ナイの文脈や内容とはかなり異なるが、文化のソフトパワーがハードパワーを侵食・転覆させるような事態が、現実起こるかもしれない。それも、日本では《サブカルチャー》として軽蔑され、文学や伝統芸能に比べて低次元だとみなされてきたアニメや漫画といったソフトパワーが、である。

これまで、漫画やアニメやテレビドラマといった《仮想現実》は、《現実》の出来事や状況や体験によって、規定され、突き動かされ、形を帯びるものだと考えられて

きた。ところが、最近では逆に、《仮想現実》が《現実》の出来事や状況を創出するという関係図式ができてつつある。例えば、アニメ『けいおん』に登場するバンドが、メジャーデビューして、オリコンのトップテン入りを3曲同時に果たしたり、漫画『ワンピース』が、神保町のまちおこしにひと役買って大盛況させるなど、日本のサブカルチャーが日本経済を動かし始めている。

ところで、我々日本人は、外国人に日本文化を紹介する時、何を紹介するだろうか？ 浮世絵、歌舞伎、能、寿司、天ぷら、空手、侍、京都、浅草・・・これらのトピックは、もともと外国人が、《日本》という国をイメージする時、真っ先に浮かぶであろう《古き良きジャポニズム》の象徴であった。我々日本人は、外国人のこうした固定観念に乗っかる形で、いい加減な武士道を説き、知りもしない茶道を教え、神輿を担いだ写真をその場ののぎに見せる。すでに手垢のついたこうしたイメージに、いつの間にか日本

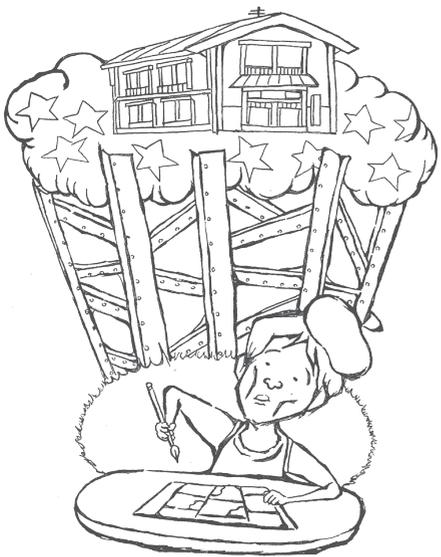
人も支配されるようになり、外国人に紹介する日本文化も、極めてあたりきりなものになる。

それゆえ、「学校のお昼休みに手作りのお弁当を食べる」という習慣が、まさか日本文化のひとつであるうとは、日本人には誰一人分からなかった。もちろん、欧米にもランチバスケットというものはあるが、日本の弁当ほど手の込んだ携帯昼食は、他国には見当たらない。アニメ『けいおん』のシーンなどに顕著だが、《学校のお弁当》という日本に特有の食文化は、外国人によって再発見された。昼休みに仲のいい者同士で机をくっつけ、かわいいパッケージをしたお弁当箱の中身を、和気あいあい食べる、という場面は、特にフランスの視聴者や読者の間でちょっとした評判になっている。こうした、「仮想現実を通じて現実の物事を再発見する」というポテンシャルも、サブカルチャーのソフトパワーは秘めている。

こうした文脈と背景を踏まえれば、西川

口でトキワ荘のようなシェアハウスをつくることも、全くの荒唐無稽な話ではなくなる。西川口に、六本木や表参道や渋谷のような大規模都市開発を期待することはできない。むしろ、過剰なまでの箱もの整備は、21世紀や22世紀を見据えた時、かなり不適切である。トキワ荘のようなシェアハウスをつくるにしても、予算面においても環境においても非常に制約がある。しかしもし仮に、夢を追いかけているアーティストが、

西川口に住み、苦楽を分かち合い、西川口を第2の故郷に据え、西川口を舞台に作品を描き、それが口コミで話題になり、アニメ化され、海外でも評判となり、西川口という名前が少しずつ知られていくようになるば・・・そんな長期的ヴィジョンを抱くことは、衰退していく西川口にあっては、数少ない希望の灯であり、夢物語やロマンスで機織りされた現実的アプローチであるように思われてならない。



協働でつくる西川口ストーリー

創造都市をめざして

早田 宰 (早稲田大学 教授)



十二月田村 (現在の川口元郷) 日光道中絵図 天保 14 年 (1843) 国立公文書館所蔵

コ・ラボ西川口の活動

まちづくり社会実験施設「コ・ラボ西川口」を開設して一年が経過した。色々な方が訪ねて来てくださるようになった。「どんな活動をしている？」といえば、以下の10に整理できる。

- ①【つなぐ】地域住民・民間企業・学生など来街者・NPO・行政の協働を支援するため、情報やサポートでつなぐインターメディアアリー (中間支援組織) の役割を果たす
- ②【資源】地域のヒト・モノ・歴史・伝統文化などの資源を掘り起こし、地域の潜在的ポテンシャルを最大化する
- ③【まちづくり】縮小する日本の将来を見据えた持続可能なまちづくりのストーリーを考える
- ④【住まう】現在地域に住んでいる人が生活の質を維持し、安心して住み続けられる住まいを考える
- ⑤【子ども】「ここで生まれて良かった」と

思えるように大切に

- ⑥【世界】グローバルな視野で創造都市の戦略を考え、議論する場をつくる
- ⑦【メディア】アートや映像を活用したまちづくり。インターネットやテクノロジーを上手く活用する
- ⑧【コスト】財源を有効に使い最大限の効果をあげる方法や基金を考える
- ⑨【コミュニティ】町会・商店会・子供会など既存の地縁組織を学生やNPOが手伝う新しいコミュニティづくり
- ⑩【学ぶ】地域の会社やまちづくりの担手を育てる次世代の人材育成などである。

百年後の川口の未来風景

このうち、③【まちづくり】のストーリーについて書いておきたい。

百年後の西川口はどのような風景になるだろう。日本の人口は2005年をターニングポイントに減少に向かっている。こ

のままの出生率では、百年後には現在の1億2千万人の約半分の6千万人になると予測されている。6千万人といえは、1920年 (大正9年) の日本の人口とほぼ同じである。グラフにすると、登る山と下る山のカーブはほぼ同じである。避けられない未来である。

百年前の西川口はどうかであったか。文献によれば、荒川沿いに米、麦、綿花を栽培する田園風景が広がり、農家が点々とし、小川が流れ、夜空にホタルが舞っていた。横曽根から芝にかけては、染織が多く機織りの音が響いていた。さらに江戸時代は幕府直轄地である。日光へ参拝する街道筋の風景が広がり、徳川将軍が鷹狩を楽しむ近郊の御狩場であった。川口宿には将軍が鷹狩の際に宿泊や休息に利用される御殿やお茶屋があった。

江戸時代の有名な儒者、安井息軒は、川

一 伊藤輝子 (1980) 大正時代の思い出 一町会のおゆみ 仁志二町会創立30周年記念誌編集委員会編

口にしばらく住んだ。慶応4 (1868) 年に日記に書き残している。「川口宿の外れに、錫杖寺がある。およそ二十株の桜が今を盛りに咲き乱れ、庭には松や杉をとりどりに植えてある。暢然 (一はんと) とうにゆったり」とする。門を出ても楽しさつきることなく、「永田楼」に上がって酒を飲む。江戸を出て十九日、はじめておいしい料理に出会えた。土橋を渡ると門樋橋の上流に出る。松の間を二百歩ほど歩き、左に折れ堤を過ぎ田圃に出ると、野菜畑、麦畑が水田の間に青々とひろがり、村の家いえがその間に点々とみえる。どこへいっても同様である」。このような都市の土地利用にだんだんと戻っていくのであろうか。

川口から発信された

大正モダン・デザイン

文化の育成は都心が郊外か。大方は都心と答えるであろう。しかし、そうでもない。むしろ逆である。川口ならではの立地好条



「紫烟荘」 堀口捨己 1927年 川口市大字芝 5347

件を活かしたい。

川口のような立地のまちは、都市の研究
者から「インナー・サブurb」と呼ばれる。
郊外エリアであるが、都心の影響を強く受
けるまちのことである。そこは新たな文化
を生み出す場所の力を持つ。

モダン・デザインの父とよばれるウイリ
アム・モリスは、ロンドン郊外のケルムス
コットで自由な創作活動を展開した。気兼
ねなく徹底的にできること。仲間と自由に
夢を描けること。それゆえ郊外を選んだ。
日本で大正時代に「民芸」を興した柳宗悦も、
都心ではなく郊外の千葉の我孫子に住んだ。

同じく大正期に活躍した建築家の堀口捨
己は、日本の伝統文化と西欧のモダニズム
建築の融合を図ろうとした。ヨーロッパに
留学した堀口は帰国して、有名な『紫烟荘』
(1926年)を設計した。この建物は現存
しない。永年場所が不明とされていたが、
近年、郷土史家や研究者の手によって、現

藤岡洋保 (2009) 堀口捨己資料 (自邸所蔵) に関する研究



2k540 AKI-OKA ARTISAN (御徒町)

在りては、現代のクラフト直売であるが、商
品は決して安くはない。高架下とはいえ都心
ゆえ地代も安くはないことであろう。数分ご
との列車の騒音が少々気になる。クラフト
作業の音であれば来訪者にも快音に聞こえ
るが、それが混ざると不協和音になってし
まう。デザイン創造は、伸びのびとした環
境で花開かせたほうがいい。

伝統を未来への強みに転換する

百年後からバックカasting (未来
への先取りの備え) し、現在私たちが可能
な準備をしなければならぬ。魅力的な場
所をつくるためには、場所性を高め、場所
のポテンシャルを最大限に活かすことが重
要である。人口減少化する郊外が人を引き
つけるには、文化の担い手の活動自由を保
障することが鍵となる。

職人の街、川口ではものづくりの精神が
市民の日常に受け継がれている。川口市民
歌は「機械の響きにはずんだ胸のリズムは

在の川口市大字芝5347であったと特定
された。1926年といえば、豊田佐吉が
現在のトヨタ自動車の母体である豊田自動
織機製作所を設立した頃である。なんと
いう堀口の斬新さと先見の明であろう。同
時に当時の川口の場所の力、潜在的な文化資
本力にも驚かされる。

「文化の卵」の育成は郊外から

100年後が明らかに違うところは、グ
ローバル創造都市化とその競争が加速度的
に進むことであろう。文化や産業の担い手
や起業家の卵を育成するには、発想を自由
にするインキュベーション (卵を孵化させ
るという意味) のスペースが必要である。

2010年の暮れに御徒町のJR高架下
に、ものづくりを中心とした商業施設「2
k540 AKI-OKA ARTISAN」
がオープンした。ファッショ、ジュ
エリー、革製品のクラフトショップが創造
都市のコンセプトにもとに並ぶ。地域ブラ

いまでも生きている」と歌う。そのリズム
を新たに「文化資本」として継承し、自由
な空気、才能を高めあう雰囲気、テクノロ
ジーを駆使できる寛容な環境へ転換するこ
とができれば、川口はこれからも可能性が
開け、主体と環境の相互デザインが加速さ
れていくにちがいない。

セイフティネットとチャレンジ創造

もうひとつより重要な条件がある。文化
の担い手の暮らしをまちが総合的に応援す
るしくみである。

サーカスの曲芸師は、セイフティネット

離れ業のチャレンジは安全ネット
があつてこそ。



(安全網)があつてこそ離れ業にチャレンジできる。安心して住み、かつそこで活動できる育成空間を確保することが地域に根づいた魅力的な文化、産業、まちを生み出す原動力となる。

いかにまちに自由な空気があつても、クリエイターの「片思い」では、いつか彼らは離れて別な場所へいってしまふ。高コストでせわしない都心ではなかなか難しい。埼玉県の中では、地域で安心して住み働けるしくみづくりの挑戦を始めている自治体もある³。ただし役所の仕事は、どうしても公共の福祉の範囲を出ない。もっと民間の発想で、自分たちのまちを協働でつくり、自分たちでチャレンジ環境を整えるアプローチがあつてもいい。

³さいたま市では、平成21年5月から国と共同で全国で初となる「地域で住み働く」ためのセイフティネットを部局横断で支援する体制を整えた。仕事と住まいの間に溝をつくらない取り組みである。若年者向けの就労支援、母子家庭の母親の就労に向けた資格取得支援、公共職業訓練や高等技能訓練期間中の世帯に対する市営住宅の優先提供、離職者への市営住宅提供の継続などの相談が区役所が総合生活支援の窓口になりワンストップサービスを提供している。

「西川口駅西口の飲食業の今後を考える B級グルメをどう活かすか？」

木村 裕美 (中小企業診断士 / 早稲田大学 都市・地域研究所 客員研究員)

コ・ラボ西川口では、クリエイターとまちがwinwinになり創発がうまれるしくみを検討してきた。その柱のひとつが、住まいの仕事塾による「プロジェクト・ハウス」である。地域貢献型人材の育成による地域再生、チャレンジできる住宅の廉価な提供、それらをリンクさせた事業モデルを検討してきた。

わかりやすいコンテクト (脈絡)

次世代のまちづくりは、①市民や文化の担い手の多様な創造活動、②革新的な地域経営、③地域への総合的な公共支援によって支えられる。この3つのアプローチを重ねながら「信頼できるしくみ」とすることが何より重要である。コンテクト (脈絡) や組織がバラバラにならないようにつないでいく新たなしかけが必要である。

このような取り組みは、近年のキーワードで「多様性マネジメント (Diversity Management)」と呼ばれる。個人の内面的



住まいの仕事塾の風景 (改築工事現場の見学会)

商店主たちが仕掛けた

ドリンクテレーリング

平成22年11月28日 (日)、西川口駅西口では川口B級グルメ大会2010、東口では世界のグルメ大会が開催された。参加店舗は創意工夫し競い合い、新たなメニュー開発ができた。地元の商店会はもちろん、仕掛けた市や会議所など官民あげてのB級グルメというトレンドによる話題作りは、大盛況で終えることができたようである。

他都市からの参戦も多いB級グルメ大会の人気投票で、意地を見せ?上位入賞してきた地元商店主たちだが、実は同年5月、6月、9月にはグルメラリーを仕掛けてきた。西川口駅西口エリアの約12の飲食店が参加して「彩の国黒豚グルメラリー」や「彩の国地鶏タマシャモ・グルメラリー」を実施した。昨年度から、地域資源研究会として検討を重ねてきた成果のひとつである。

地元埼玉産の共通食材をテーマに

な動機づけや価値の重視、立場の相互尊重、国際的な視野、他人や他地区との差異化、財源や時間など貴重な資源のきめ細かな調整と効果の最大化、現在進んでいるプロジェクトの可視化、公平性と説明責任が重要である。また立場を超えた協働を可能にする新たなグローバル・シチズンシップ教育も欠かせない。その戦略的シナリオを共有し、取り組んでゆける郊外のまちだけがストーリー性が生まれ、百年後に向けて進んでゆける。

1000円以内という同一価格で、それぞれのお店で味を競い合ってもらおうという企画は、新規顧客開拓に一役買ったようだ。

西川口は誰の居場所か?

「ここは男性客が中心だが、実は深夜を過ぎると女性客も増える」と20年以上前に、教えてもらった。仕事を終えたホステスが立ち寄る店が多かったそう。では今は?これからは誰のためのまちづくり、店づくりをしていくのか?

B級グルメ大会は、西川口が違法風俗から飲食のまちに変貌するための努力をしていることを周知するという一定の役割を果たしている。グルメラリーは、まだ試行錯誤だが地元商店主達が新たなネットワークを組んで自律的に活動を始めた事の意義は大きい。

みんな来てね!

3店舗回ると
ペア温泉宿泊券
が抽選で当たる

各店舗抽選品も、もりだくさん

5月
13(木)・14(金)・15(土) 西川口西口ドリンクテラーリング

彩の国 黒豚グルメラリー

2010年5月に行われた、「彩の国黒豚グルメラリー」のチラシ。

西川口南通り商店会では、日頃のご愛顧に感謝し今回特別セールを企画いたしました。お試し価格にて、各飲食店の、彩の国 黒豚を使った特別メニューが楽しめます。さらに、期間中3店舗ご利用の方には、抽選で豪華景品も当たります! お友達とご一緒に、またはお一人様でお気軽には、是非ご来店くださいませ!



これなら安心、初めての店にもチャレンジできる!是非3店舗お回り下さい

黒豚グルメ以外のメニューも豊富にございます。是非お試しください
ご来店3番目の店でチラシは回収させていただきます。後日主催者側で
厳正な抽選を行い、当選された方にはご連絡させていただきます。

お会計の際に、チラシをお出し下さい。店印を押さしていれば大丈夫です。グルメ内容・店舗案内は裏面をご覧ください

店印①	店印②	店印③	お名前
			ご住所
			ご連絡先

西川口南通り商店会ドリンクテラーリング実行委員会

のような戦略が必要かは厳密に言えば各店異なる。しかし、共通する外部環境変化にどう適応するのかという基本課題は共に解決するほうが、効率がよさそうだ。そのために始まったグルメラリーは、テストマーケティングが終わった今こそ、計画性のあ

る新規顧客開拓からリピーターの増加、固定客の育成のための仕組みが必要である。ちなみに「キューポラ・ハイボール」は、同店も参加するバーの連携組織K・B・A 21(川口・バー・アソシエーション)の主催者であるミルウォーキーズクラブ(川口駅下車)で、平成22年夏に川口のまちおこ

しのためつくられたもの。イベント時以外にも、今後は市内に普及させてこうとK・B・A 21は奮闘中である。

西川口の変貌ほど急激ではないが、川口市自体が铸物のまちからベッドタウン化してきた環境変化も大きい。地域住民の様々なニーズやシーズに応えた居場所が、今市内全域でも求められている。「誰のための、どんなまちにするか?」それは、地域全体で市民自らも、主体的に居住や職、他の居場所の環境づくりについて考えなくてはいけないということをも示唆している。



西川口西口のバブ「CASK AND STILL」

しかし、そのターゲット像はまだ見えていない。まちづくりにおいては、現在我々もお手伝いしているビジョン策定作業が進行中だ。作業過程ではあるが、地域住民の声でも、まちの今後あるべき姿は「食のまち」というイメージがやはり強いようだ。

それでは、食を担っている各店舗は、誰に、何を、どのように提供していくのか?」

待ったなしの生き残り策が必要な各店舗は、今後も持続可能な答えを自ら見つけ出さなくてはならない。

駅周辺の飲食店には様々な利用法がある。例えば、学校や仕事の帰りや家事や用事の合間、駅の利用の前後に立ち寄りひと時を過ごす。空腹を満たす。喉を潤す。心を癒す。作業する。憩う、一服する、会話する、団欒を過ごす等等。違法風俗が多かった時とは、異なる顧客の、異なるニーズやシーズを受け止められる柔軟性が必要となるだろう。ついではなく、「この店に行きたい」という目的になれば、なお良い。

地域住民の

「コミュニケーションの場を提供

そんななか、既に自店の方向性を明確にしようとしている店舗もある。B級グルメ大会の時、「キューポラ・ハイボール」を新たな地元名物にしようと屋台で作り続けていたバブCASK AND STILLだ。

経営者の川本さんは、「飲食業は地域の人々に対して常に開かれた場所となることで、家庭でも職場でもない第3の居場所の機能をもつ。居場所が増えると自ずと町への愛着生まれる。この機能を果たすことが飲食業の社会的責任だ」とブログで語っている。そして「まずは飲食店から地域住民の方々のコミュニケーションの場を提供していくべきだと思います。その第一歩を踏み出すことがこの『グルメラリー』の大きな目標に他なりません。」とも語っている。

居場所のニーズは人様々である。またそれを受け止める店の環境も様々である。よって、この目標「あるべき姿」にむけて、ど



つながりの装置 としてのイベント

—ある男性の物語から—

沼田 真一（早稲田大学 参加のデザイン研究所 客員研究員）

「人生でこれほど感謝されたことはない。本当に参加できてよかった。ありがとう。」私はあるイベントのファイナルで彼からこんな挨拶をされた。

彼は障がい者だった。杖がなければ満足に歩くことが出来ない。話をするにも、ゆっくり話しをしないと、内容を十分に理解できず、会話ができない。

彼は、いつでも、どこでも、だれかに「助けてもらう」存在だった。週に数日は施設におり、体調のよいときは作業場でお菓子の箱を作る毎日。

そこに大きなイベントがやってきた。参加者募集のチラシを見た彼は、その出展者として参加するために説明会にやってきた。

正直、彼が何を思っこのイベントに参加することにしたのかわからない。単純に楽しそうだったからなのかもしれないし、なにか記念品がもらえると思ったからかもしれない。

いずれにしても、「自分がイベントの中でフティネットとして機能しうるかもしれないし、なにか新しい活動を始めるのに、応援し、助け合える仲間になってくれるかもしれない。

私は家族であろうと、仕事仲間であろうと、高校時代、大学時代の友人であろうと、好きな映画や音楽や本の話をしていたい。

きっと西川口でも、そういうふうに思う人はいるのではないか。そのテーマはさまざまだろうが、あるイベントという非日常空間の中で、自分の興味関心と共鳴する人と出会えたら、その出会いの場に感謝する

どんな出展を行うか」という打ち合わせを行う中で、多くの参加者からアドバイスを受けた彼は、自分のカメラ好きを活かして、イベント会場で、ポラロイドカメラを使って記念写真を撮ってあげるという企画を完成させた。彼はイベントの会期中、カメラを片手に来場者に記念写真を撮影する「カメラマン」として、イベントデビューすることになったのだ。

子どもたちから声をかけられ、写真をと撮る彼。そして、その現像されていく写真をプレゼントする彼。子どもたちに「ありがとう」と感謝される彼。それはとても微笑ましい光景だった。真夏の季節なのに、汗をかきながらも楽しそうに写真を撮り続ける彼は、気がつけば、杖をついて歩く様子も見られなくなり、みるみる元気になっているように思えた。

イベントというと、その言葉から思い浮かべる形は人それぞれだと思うが、すくなくとも共通しているのは「非日常」というだろうし、その友人のいるまちを好きになるだろう。

そこには写真をとってくれる不思議なおじさんがいてもいい。そして、彼が映画好きのおじさんで気が合う人だったら、私はそのまちなカフェで、彼も交えた友人たちと定期的に映画談義を始めるかもしれない。「ねえ、みんなで今度、好きな映画を持ち寄って、映画祭をやろうよ！」こんなふうに。

「まちづくり」はこんな、思いのある人々の小さな「イベント」から始まるのではないかと思う。

イベントはつながりを生み出す装置である。最近、まるで何かの呪詛のように「無縁社会」という言葉を聞くようになったが、普段我々を取り巻く地縁関係、利害関係、上下関係を離れて、一人の人間として興味関心からコミュニケーションすることができれば、そのつながりはまったく新しいネットワークとして、自分の生きる活力となり、豊かな生活に欠かせない心理的な安定・安心を与えることになるだろう。それは、セー



右上 「自由演奏会パレード」 みんなで楽器をもって集まろう！ '聖者の行進' を皆で演奏し会場を練り歩く。その日あつまった人見ず知らずの人達でパレード。

左上 イベント会場に「畑」を作ってみんなで育てる！無茶な思いから始まった企画も実現する。横浜の農の一面を伝える。子どもから大人までが参加し育成と収穫

左下 「カメラマン：カガミさん」壁面いっぱいの撮影した会期中の写真。2枚撮影し、一枚は会場に残してもらった。

まちはみんなで作るもの 第2回 -2011年-

橘 麻由 (コ・ラボ西川口)

●これまでのあらすじ

今回で2回目となるコラムである。前号では、西川口が繁華街からどのように風俗街になり、さらになぜ今の様な活気のない状態となったのか、グローバル化の影響を踏まえて解釈し、執筆当時の再生活動の流れまでを追った。その結果、西川口では、今までされてこなかった「地域をどうするか」という話し合い・合意形成の場と、「こんなまちにしたい」という地域の将来像、「ルールと連携」、をつくる事が一番の急務であると述べた。それからちょうど1年が経つ。2010年を終えて、西川口は今？

●西川口・地域全体の大きな流れ

いくつかの地域再生活動のうねりの中、地域活動の見直す動きが出てきた。2010年3月に、西川口のまちづくりに関する勉強会が持たれ、地域商店、西川口で有志に活動しているまちづくり団体、大学と市とで意見交換が行われ、まちのビジョ

ンと連携体制をつくるという方向が話し合われた。その結果、「連携」のために、西川口駅周辺の町会、商店会、まちづくり団体、大学、県、市、議員からなる駅西側地区、駅東側地区、ビジョン部会の3部会が設置される事が決まった。現在も、西川口をこちづくり懇談会を事務局とし、西川口をこんなまちにしたいというビジョン作成の準備が進められており、市を中心としてその為の調査が行われている。

●西川口・地域の魅力と活力へ個別のプロジェクト

全体の体制整備が少しずつ進む一方で、B級グルメ大会のイベントが行われた。コ・ラボ西川口でも試食会などのプロジェクトを行ってきた。内容に関しては、この小冊子のそれぞれのページで詳しく紹介している。学生が積極的に関わり企画するイベントがあったり、地域の方の参加が増えたり、

地域外の専門家によるワークショップが行われたり、少しずつまちづくりによって、人と人との関わりが広がりつつある。

●西川口に今必要なこと

新しい共存のスタイル

多様な人々が共に生きる

このように現在の西川口では、様々な立場、考え、出身の人々が出会って話をする機会が少しずつ増え、その中で、西川口の課題や、「こつなつたらいいなあ」というま

西川口には、単身世帯の若者や高齢者のような幅広い世代、職業の違い、特に外国人の居住者が多いため、文化ルールの違いなど、実に多様な考えや価値観を持つ人々がいる。また地域の外に住んでいながら、地域に関わりを持つ人もいる。このような中、対立するのではなく、上手く共存するには、お互いのニーズの差や得手不得手を共通認識として、役割分担することが非常に重要である。なぜなら地域再生のカギは、それぞれ「人の魅力」「地域資源の魅力」によって生み出される「コラボレーション」にあるからだ。

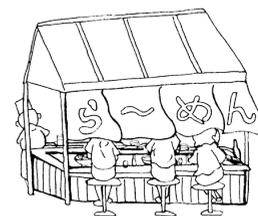
る形で実現させていかななくてはならない。その為の、連携体制の本格化が、今まさに西川口に期待されることである。

もし、みなさんなら、地域で困っていると言った時、誰の顔を想像するだろうか？西川口が元気なまちになったとき、誰の笑顔を想像できるだろうか？ 家族か、友達か、なじみのお店の店員だろうか？

今は「多様な考えや所属をもつような人々が一緒に何かやってみる」という経験をたくさん積み重ねて、「新しく創る」「選んで決める」力をつけていくことだろうと思つ。これを少しずつ積み重ねていく一方で、違法風俗の地下化など、元の木阿弥になりにくいリスクもある。その抑止力となるためにも、遅きに失しないように、目に見え



2010年夏からは西川口まちづくり懇談会が開催され、ビジョン形成に向けた議論が継続的に行われている。



鉄塔横町の記憶

田んぼから繁華街へ。西川口のまちの原点をたどる。

野口 琢生（早稲田大学 大学院）

西川口にかつてあった飲屋街、その名も「鉄塔横町」。この横町の話は岩崎忠次郎氏（そは尾張屋）からお聞きした。

旧国鉄が西川口駅を開設したのは昭和29年（1954年）9月のこと。それまでは水田の広がる場所だった場所が、この後開発されて徐々に市街地へと変わっていった。昭和20年代から30年代、国鉄の駅の周辺や線路わきの路地にはどこでも屋台の集まる屋台村があった。西川口駅の周辺でも、西口の交番（現在のエレベーターがある辺り）から南に向かって10軒程度の屋台が集まってお店を出していた。

しかし、あるときからこの屋台が通行の妨げになるなどの問題が生じて、屋台が出店できないことになっていった。困っていたところ、原っぱになっていた鉄塔の下の土地（現在の西川口1丁目10番の一部）に移ることになった。

この当時の西川口にあった鉄塔は、現在



1960年代の西川口駅西口。まだ駅前は舗装されていない。この写真のちょうど下辺りから左側（南側）に向かって屋台が並んでいた。その後鉄塔の下へ屋台が移転し、鉄塔横町が誕生する。

の鉄塔と似た形をしていたが、大きさは小さかった。それでもコンクリートの土台のあるしっかりとしたものだった。

電力会社との取り決めの中で、建前上鉄塔の下を何かに使ってはいけないことになっていったが、屋台を出店する場所がなくなって生計を立てることができなくなった窮乏者いるし、屋台を出すくらいであればしょうがないということになったそうだ。こうして線路わきで営業していた屋台が鉄

塔の下へ移ることとなった。

鉄塔の下は先着順で場所が決まっていた。営業が始まると、屋台でお店を出すはずだったが、徐々にバラック（barack：仮設の建築物）が建つようになった。電力会社との取り決め上問題があったのだが、鉄塔の土台から2m以上離れること、一定の高さを超えないことなどの決まりを書いた通知が電力会社から届いたので、特にバラックを建てるのが禁止されることがなかった。こうして鉄塔下の「鉄塔横町」が形成された。

岩崎氏も当時屋台をやっている、駅前からこの鉄塔下に移って営業をしていて、友人に協力してもらいながら建物を建てていった。岩崎氏の店は2帖半ほどの広さで、そこでそば屋を営業していた。他にも11、12軒ほどのお店があって、ほとんどが居酒屋だった。鉄塔横町には風俗店はなかった。（少なくとも表立ってやることはなかった。）2帖半程度の広さで営業する店は大きいほ

鉄塔横町の所在地

現在は風俗店の建ち並ぶ一角（西川口1丁目10番）に鉄塔横町はあった。下の地図は1970年のもので、すでに鉄塔横町はなくなってビルに建てかわっている。この頃はまだアパートが多いが、このあと数年の間にこの街区に風俗店が密集して営業をはじめ、現在に至っている。



うで、多くの店はその半分程度の広さだった。通りから入って横町に沿って軒を連ねていた。横町の一角には共用のトイレがあった。水洗ではなく汲み取り式で、農家の人が引き取りに来ていた。横町の経営者が毎月それぞれ200〜300円程度払っていた。

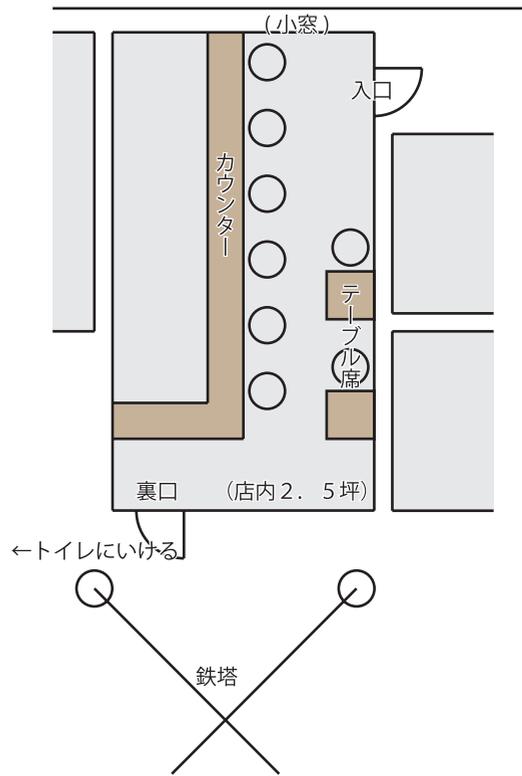
鉄塔横町の居酒屋の経営者は女性が多く、駅前などで客引きをして横町まで連れてきていた。このころは景気の良い時代だったのでかなり儲かっていたようだ。ツケで飲んでる人が多くて、たまにもめたりすると、女性だけでは解決できないので、岩崎氏や他の店の人が駆けつけて行って収めることもあった。ツケうま（ツケを払えなくなった人の家にお金を回収しに行くこと）

をやったこともあった。鉄塔横町の経営者同士で比較的つながりがあった。ただし、経営者はずっと固定ではなく、頻りに変わるが多かった。

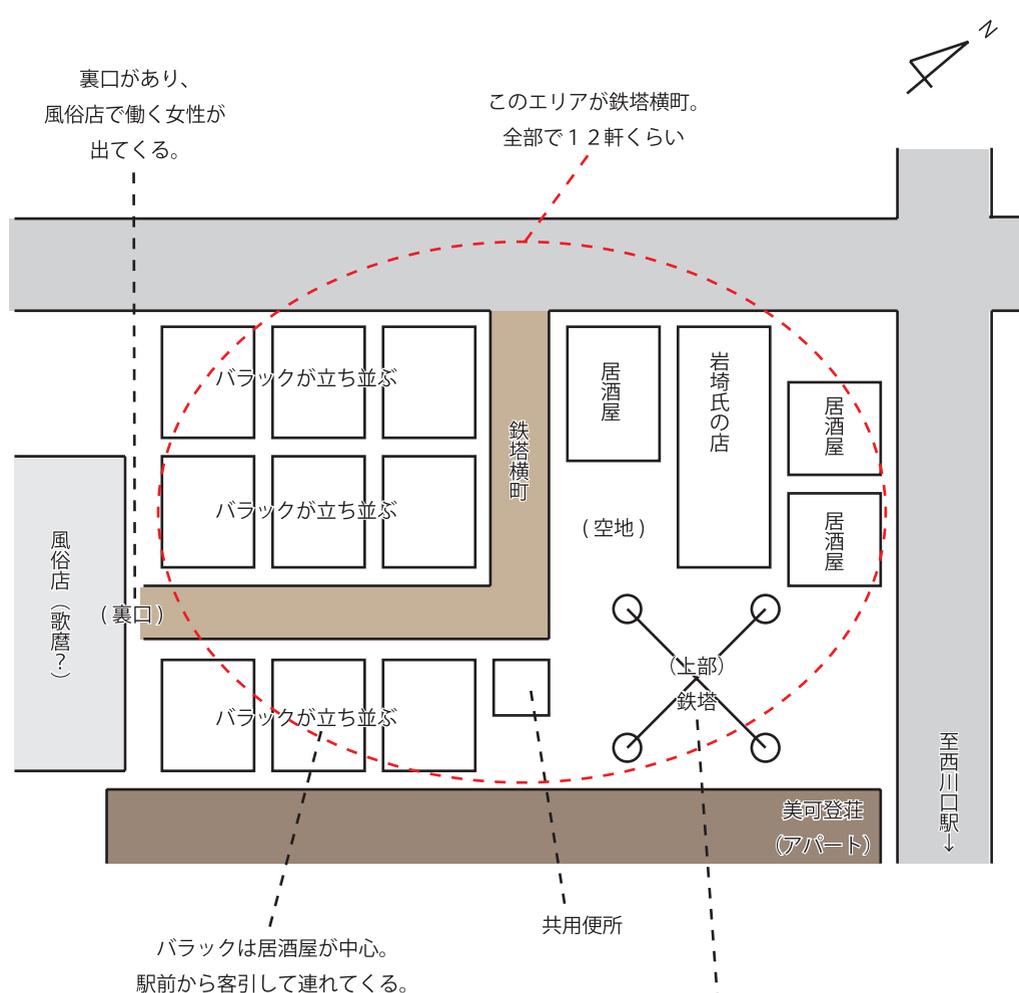
この鉄塔横町は西川口だけでなく、大宮や赤羽でも有名、いいお店もあって評判がよかったようだ。一方で、風俗営業のお店は23時に閉めなければならなかった時代に、鉄塔横町では夜中まで営業していたため、

地元では評判が良くなかったのかもしれない。地域のドブさらいなどをして、あまり評判が悪くならないように心がけていた。

地元の人の利用もあって、ビール会社の寮を建設しているときには、その建設会社の人が来ていたこともあった。また鉄塔横町の奥に風俗店の裏口がつながっていたため、そこで働く女性がよく蕎麦を食べに来ていた。



鉄塔横町の店の中



西川口の鉄塔横町はこんな場所だった！

現在この場所へ場所へ行くと、その狭さに驚く。この敷地に駅前から多くの屋台が移ってきて、バラックが建てて営業をしていた。

1968年頃になると、鉄塔を撤去する話があり、それに伴い鉄塔横町のある土地が市場で取引されることとなった。岩崎氏は、不動産会社から土地を売ってほしいと声をかけられたが、土地を持っているわけでもないで売るわけにはいかず、経営権を譲り渡すこととなった。

この土地に鉄塔が撤去される前後で、鉄塔横町が一掃されて、代わりに地下のある建物が建てられた。1970年の住宅地図の記載されている建物はこの建物で、その地下に入ったのが「地下トルコ」だった。地図に記されている「権兵衛」や「鉄塔寿司」などのお店は、鉄塔横町から引き続きこの場所を借りて営業を続けていたのではないかと、このことだ。

いまでは現地を訪れても、面影すら見つけることは困難だが、すでに忘れ去られた西川口の原点の1つ、この空間の記憶を書き留めておきたいと思う。



西川口に住む韓国人の暮らし

韓国人には西川口はどう映っているのだろうか

朴 成賢（早稲田大学 大学院）

まちは数多くの場所と、様々な人々の生活が結び付けられた場所である。我々はまちで他の人々と交流しながら生きなければならぬ。しかしながら、異なる考え方や生き方を持っている人々と一緒に暮らしていくことは容易ではない。特に、異なる言語や文化を持っている外国籍の人々と一緒に暮らしていくことはより難しい。

西川口にはこのような外国籍の人々が少なくない。駅周辺でも住宅街でも外国の言葉話す人を頻繁に見かける。現在、この地域にある小学校の児童の6人に1人は外国の国籍を持っているようだ。グローバル化が深化する今日、このような西川口の状

況はより進行するだろう。したがって、彼らと同じコミュニケーションで生活を営んでゆくためには、お互いの生活を理解し、その文化を認め合うことが必要である。

そこで、西川口に住んでいる韓国人にインタビューし、その生活を考察する。

東口で会った韓国人

床屋を経営する崔ドンカンさん

西川口駅の東口から徒歩3分ほどの場所のミニヨンビルの2階に理容プラザという看板が見られる。何気なく見れば他の床屋と変わらないが、実はここを経営しているのは韓国人である。渡日した一般的な韓



国人とは少し異なる仕事をしている理容店の崔ドンカンさん（50歳、蕨居住）は、2010年2月現在の場所にお店を開業した。これから理容店の崔さんの日本生活について紹介する。

30年間散髪をしてきた崔さんは、日本に来てからすでに23年という月日が経った。初めて日本に来たときは新宿区にある理容店で働いたため、生活圏は主に新宿区であっ

た。そこで10年くらい働いたのち、大宮にあるお店に移って、西川口についても自然に知ることとなった。その当時、西川口のイメージと言えば風俗で有名な場所だったため、イメージは良くなかった。

床屋で20年くらい働きながら、経済的な安定とともに個人事業のことも考えていた。当初、蕨駅の周辺で開業するつもりだったが、いろいろな事情があつて蕨での開業をあきらめ、偶然西川口を見つけて、この地域での可能性を確信した。

現在、客のほとんどは日本人であり、3人の従業員も全員日本人だ。昨年開業したが、個人的な健康上の理由と地域経済の落ち込みで、期待していた売上には至っていない。しかし、彼はここでの生活に満足している。人生の半分を日本で暮らしているため、今は、韓国人よりも日本人と話す方が気楽に感じているようだ。理容店という職業は客と話し合う機会が多いため、様々な地域の情報やエピソードを耳にする。客

右 東口で理髪店を営む崔さん。
下 理容室の店内と外観。





左 韓国のDVDが豊富。



右 韓国から直輸入した食料品が充実。



左 西口の大通りに面した韓国マーケットBIG5。



右 BIG5を経営する李さん。

の中には崔さんを地域のイベントや活動を勧誘する方が多いそう。昨年には健康上の理由で参加できなかったが、これからは地域の一員として一緒に参加したいと言った。

最後に崔さんは、多文化共生という観点でこの地域がさらに住みやすいグローバル・ビレッジになるためには、外国人である自分自身がまず、努力しなければならぬと云う。つまり、自国方式の営業形態や同じ民族だけを対象にする営業形態にこだわることをやめ、言語の障壁を越えて、日本の営業文化を理解し、積極的に地域住民たちと交流し参加しようとする努力が必要であると強調する。

西口で会った韓国人

韓国マーケットを経営する

李リヤンソンさん

最近、KARA、少女時代、東方神起のような韓流グループの曲をメディアや商店

映画のDVDなども一緒に扱っている。彼がこの店を経営し始めたのは2010年7月からであるが、この店自体は20年あまり前から営業しているそうだ。地域住民にも認知度が高く、韓国人のみならず日本人や中国人も利用する。

李さんがこの店を引き受けることになったのは、ここでお姉さんが20年前から事業（BIG5の近くにあるソウル焼肉）をやっており、1998から2002年まで日本に留学していた際には西川口で生活した思い出があったからである。そのため、彼は西川口に対して親しみを持っており、イメージがあまり良くなかった時期でも、ここに住んでいることに恥ずかしさを感じてはいなかった。西川口では外国人として差別を受けたこともなく、言語の問題もなかったため、今も全く不便ではないと言った。また、最近には川口市の商工会議所の仲間の勧誘で商工会議所のメンバーとしても活動している。

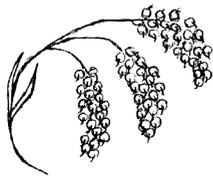
街などで頻繁に耳にするようになった。00年代の前半に冬のソナタをきっかけにした韓流ブーム以来、エンターテインメントのみにとどまらず、日本全国で韓国の商品を取り扱う店を頻繁に見かけるようになった。

以前は、韓国の商品を購入するためには新大久保までいけなければならなかったが、今は簡単に韓国の商品を見つけることができる。西川口にも東口と西口に1つずつ、2つの韓国マーケットがある。今回お話を聞いたのは、西口から徒歩2分ほどの場所にあるBIG5の李リヤンソンさん（42歳、西川口居住）だ。正午にもかかわらず、彼の顔は疲れ気味に見えた。普段は正午にオープンし、夜中3時まで営業しているが、昨日も夜遅くまで働いていたようだ。これから、彼の日本生活について紹介する。

李さんが経営するBIG5は、年中無休で甥とアルバイト1人の3人で営業している。ここで販売しているのは韓国の食料品だけでなく、韓国の化粧品や韓国ドラマ・

しかし、李さんは昔、ここで暮らしていた当時に知った知り合いはほとんどが去って行き、特に周囲の韓国人経営者たちが少しずつ去っていくことを残念に思っている。地域が新しい活路を見つけることができなければ、さらに衰退してしまうのではないかと懸念を持っているそうだ。

他者に対して排他的・利己的には接することは、本人だけでなく、地域社会全体にとって不幸である。先にも述べたとおり、自分と異なる考えや異なる価値観を持つ人々と一緒に生活するためには最も必要なのは他者の生活を認めることである。他人の考えを認め、彼らの価値を一緒に共有するとき、彼らを包容することができ、多文化共生が可能になる。皮膚の色や言語文化を持つ人々を理解し、共同体意識共有することができれば、多文化共生のまち西川口となるだろう。



川口活性化の起爆剤となるか？ 座談会「川口の麦味噌」

その行方を追う

山崎 秀一（彩の国地域振興協会 設立準備委員）

2011年2月7日、川口の将来を担う「川口の麦味噌はどこへ行く？」の座談会が行われた。

会場は、店主のセレクトで、和モダンな調度品がさり気なくしつらえてある西川口駅東口のそば屋「亥の刻」。

川口ではかつて、南平地区などで麦の作付が行われていた。また、江戸時代末から戦後まで麦味噌の醸造が盛んで、最盛期には8軒の醸造元があり、たいそう賑わったという。しかし、「2つの問題」で衰退していくことになる。

1つ目は水の問題である。開発が進み麦味噌醸造には欠かせない良質な地下水が確保できなくなっていた。2つ目はライバルの出現だ。今では幅広く流通している信州味噌の台頭が川口の麦味噌を凌駕していくことになる。時代の流れには抗しきれなかった現実がここにある。

今回は、そんな麦や麦味噌に思いを馳せ、復活を願う関係者や識者たち12名が集まった。

てもらい、参加者の自己紹介からゆるりと始まった。

「麦と味噌を復活させ川口を活性化できないか。」新井氏が口火を切る。

「かつて麦味噌を製造販売していたが今は販売のみ。観光で川口をつなげたい。」と田中氏が続く。

のっけから熱のこもった意見。はたして、川口の麦味噌はいったどこへ向かうのだろうか・・・

●麦味噌の利用法や方向性

川本昇氏：「麦味噌の利用や料理の仕方など知ってもらった方が良い。」

白井氏：「味噌をデミグラスソースなどにアレンジして使える。食育で味噌を使うのもいい。」

櫻井氏：「美味しい味噌を（作って）田中さんで売ってみては？」

田中氏：「味噌製品ができたら」売ってみようか・・・

麦味噌をどのように扱うべきなのか？
ざつくばらんに話が弾む。

●麦味噌の驚くべき効用

川本八重氏：「主人が脳梗塞で入院。病院で麦味噌が良いと言われ実行した結果回復した。」

山崎：「薬膳の観点から麦味噌の効用は？」と薬膳師である石塚氏に。

石塚氏：「大麦には解毒作用、小麦には安眠作用がある」「麦はお通じや肌が良くなり、美容系にも使える。」

ここで、石塚氏お手製の麦味噌を使ったおかず味噌（わさび・カレー・芝漬など）登場。皆で試食。いずれも「オイシイ！」と感嘆の声しきり。

効用や商品案まで飛び出し、石塚氏の話に一気に引き込まれる。

●他の試みや川口の特産品

伊藤氏：「ノーマライゼーション（障害者な

ど社会的弱者を意味する）のノーマライゼーションは農業の農とされおり、400坪の休耕地を利用して（障害者たちと）そばを作る。」

川口の特産「浜防風」の話題にも、川本八重氏：「和風クレソンでありいろいろな料理にも使える。どうしたらもっと広がるか。」

田中氏：「希少価値を守るため」PRの戦略が難しいようだ。

●はたして、

川口の麦味噌の行方は・・・？

高野氏：「女性は手をかけるのは嫌があるのでレトルトなどが良いのでは？」

櫻井氏：「このような場の継続的な開催が必要。」

新井氏：「埼玉の農産物（小松菜、ほうれんそうなど）+麦味噌で（おかず味噌を）作りたい。」

木村氏：「地域ブランドを作り皆で盛り上げよう。」「これで終わるのではなく、始める。」「力強く締めくくる。」



川口の麦の復活に熱い思いを持つ12名が集まった。



青木町5丁目の緑化

朝の水やりで花は元気

早田 宰 (早稲田大学 教授)

東口は花緑がきれい

西川口駅の東口から延びるオートレース通り。花緑がきれいなことで有名だ。産業道路をこえてからも草花が一年中咲く街路がつづく。沿道の緑の世話をしているのは町会の皆さん。青木町公園入口交差点から二家レストランのある青木中央交差点までは青木町5丁目町会が担当している。その活動の中心になっているのが青木地区連合町会長・青木町5丁目町会長の伊古田朝三さん(80)である。「花は気持ちがいいね。」伊古田さん自ら水やりの先頭に立つ。青

木町5丁目町会がこの活動を始めたのは12年前から。始めたのは先代の町会長のときだった。伊古田さんはその当時副会長。良いことだと皆で賛同して始めた。

一人でも続けてきた

しかし人は飽きやすい。半年とそのもりあがりには続かなかった。自分の家の前の緑は世話をするのがルールだった。次第に億劫になる人が増え、放ったらかしの鉢も出てきた。伊古田さんは枯れそうな花を見つ

けると、近所から水をもらって替わりにまいた。しかし歯止めはかからない。ある日、伊古田さんがチャイムを押ししたら、「うちの水を使うつもりですか」といわれた。

「せっかく先輩が始めたこと、守っていかなければ。」伊古田さんはどうしたら維持できるかを考えた。そこで町会がまとめて草花の面倒をみることにした。中心になって動けるのは町会長、副会長の3人である。実際は一人のことも多い。ところが街路の長さは900m、花の数は1150鉢もある。どうやったら無理なく作業を数人で行えるのか。

散水車を自前でつくった

伊古田さんは、車で散水することを考えた。ポリエチレンの大きな防災用ローリータンクに水を入れ、軽トラックに積んで運ぶことにした。タンクの栓をひねって大きなバケツに水を移し、さらに小さいバケツでそこから汲み出して水をまく。部品は自分で買って装置を自作した。その新兵器の

おかげで散水作業は30分に短縮できるようになった。

朝4時に起きて

一方、タンクに水を溜めるのも一苦労だ。500リットルで30分かかる。全部まくには800リットルで、2回ためる必要がある。日中は各家庭が水を使用するので水圧が下がり溜めるのに時間がかかる。自分の仕事にもさしつかえてしまう。そこで朝4時に起床してタンクに溜めることにした。これしかなかった。

市と相談し、西青木4丁目公園から水を使う許可も得られた。公園の特殊な蛇口の形式から水を汲みだす添え木も自作した。

おおむね週に1度水をまく。「曜日や日にち?とくに決めていないですよ。花は生きていますからね、土を触ってみて、元気をチェックして、必要だなと思ったらあげるんです。夏場は週に2、3回にもなる。」まだまだ現役。元気なうちはボランティアで続けたい。



軽トラックで朝4時に水をまく



植え替えは町会で行う



伊古田朝三さん



韓国における新しいまちづくりの変容

—大邱（テグ）広域市三徳洞 (Samdeok-dong) まちづくりより—

朴 成賢（早稲田大学 大学院）

韓国社会は、急速な都市化に対応するために住宅の量的供給と住居地の物理的環境改善を中心に都市整備事業を推進してきた。都市整備事業が公共と大企業の成長連合を通じた全面撤去型開発方式で定形化され、住居の物理的環境改善と量的供給は一定の成果を成し遂げたが、まちに蓄積された社会的文化的資源をはじめとする固有の場所性は破壊された。ニュータウン (NewTown) 式のまちづくり、共同体およびコミュニティやその社会的ビジネス基盤の解体、住民離脱の構造化など、現在の主流の開発モデルは、数多くの根本的な問題を抱えている。さらに、空間の物理的改善と不動産で発生する利益にだけ重点をおき、「いったい誰のための開発なのか」という問題提起も深刻化された。

今日でも、ソウルをはじめとする多くの都市ではニュータウン式（全面撤去型開発方式）まちづくり事業を推進している。しかし、このような中、韓国でも新しいまち



上 三徳洞まちづくり支援センターである緑地
(ロクセクカゲ)



左 塀を崩して開かれた緑地空間

づくりの動きが10年余り前から活発に展開されている。したがって、本稿では韓国の代表的な最初のまちづくりの有名な事例の1つとして、大邱広域市の三徳洞(サムドクドン)まちづくりを紹介しようと思う。

三徳洞とは？

三徳洞は大邱広域市中区に位置する典型的な衰退した旧市街地で、70年代の大邱広域市の旧都心の形態をいまだに持っている。日本統治時代には日本商人住居密集地域であり、朝鮮戦争後には避難民村が形成された。60年代末になると、区域整備事業以後、では大邱広域市の最高級住宅街として名声を博したが、老朽化した住宅により住宅地としての魅力が徐々に減少し衰退していた。

2000年代に入り、都心住居環境整備事業や再開発事業が大々的に実施され、この一 大邱広域市は、韓国の東南部に位置する内陸都市で、ソウルからおよそ300kmの距離に位置している。ソウル、釜山、仁川に次いで4番目に人口が多く、ソウル、釜山の2大都市の間にはいる。

さらに都心商圏を対象にした低所得層労働者と零細自営業者が大挙流入している。また、このまちは都心河川と隣接していて、都市高速道路と地下鉄2号線駅を中心に発展の可能性を持った地区である。

三徳洞まちづくりは

どのように進行されているのか？

三徳洞まちづくりは、このまちに引越してきた市民運動家キム・ギョンスン氏(市民団体YMCA役員)の「塀崩し事業」にその起源を探ることができる。1998年11月、戸建住宅の「塀崩し事業」を筆頭に戸建住宅6ヶ所をはじめとして、三徳洞住民自治センター、教会、小学校など12ヶ所の塀を崩して開かれた空間に、都心の不足した緑地空間を作った。この事業は行政機関と公共機関、民間建物へ拡大し、99年と00年にかけて活発になった。「塀崩し事業」は住民参加型の都市デザイン事業の一環として、少ない費用で開かれた緑地空間造成

や住民自律管理などを行った革新的意味を持つだけでなく、まちの共同体形成を活性化させる韓国のまちづくりの代表的事例として評価されている。

97年以後「住みやすい三徳洞づくり運動」は現在まで継続的に展開されてきている。「塀崩し事業」を通じた路地公園、まちの休憩場造成などの事業を始め、97年には大邱青少年支援センター開設、01年には美術館開設、02年にはまち音楽院²開設、04年には無料保育施設開設、04年には三徳小学校の塀崩し事業の実施および住民緑公園(ピオトップ公園など)造成し、市内バスを改造した三徳洞子供移動図書館を設置して運営している。また、毎年2回三徳洞の地区祭り開催、子供環境絵画展の開催、キムチの漬け込み分けあい行事、まちの学校運営など多様な事業を展開してきている。

三徳洞では「塀崩し事業」と共に、「壁画

² 韓国伝統音楽「国楽」を公演から博物館までまちへの施設である。



作成事業」を三徳洞空間デザイン事業の核心的プログラムの1つとして展開している。「壁画作成事業」は様々な素材を使って実験的に実施し、企画段階で住民との対話と討論を通じて実施した。99年に壁画作業実施して以来、17ヶ所に壁画を完成したが、その内5ヶ所はワンルームマンション建設と駐車場造成などのために撤去され、現在には12ヶ所の壁に壁画が設置されている。

一方06年には、三徳洞通りや住民自治セ



上 三徳洞の壁画(環境と調和した壁画)
下 三徳洞の民家の壁画

ンター、戸建住宅を舞台に、全国20ヶ所余りの人形劇団やマイム劇団を招いて「三徳洞人形マイム祭り2006」を開催した。生活空間としての三徳洞の場所的な特性を発掘し、まちの路地と建築物を祭りの背景とすることで、観客が公演と共にまちという人生の場所を同時に体験できる、企画と文化コンテンツがよく結びついた成功的な祭りであった。

三徳洞まちづくり運動の危機と克服

しかし、三徳洞も韓国都市社会で流行する再開発の影響を受けて、試練の時期を経験することになった。再開発は、まちの歴史を消し去り、新しい建物が古い建物に代わり、新しい入居者が既存住民を代わることになり、既存都市共同体を崩壊させてしまう。06年に三徳洞が再開発予定区域として告示され、10年間のまちづくり成果がこの再開発事業によって消えてしまう危機に直面することとなった。当時の地区の住民は賛成と反対、そして傍観の3つに分かれた。06年7月から07年12月までの激しい対立は、再開発に反対する人々の積極的な努力と対応、再開発を賛成する人々の内部葛藤、そして未分譲アパートの続出などによって一段落した。その後、三徳洞まちづくりはさらに多くの住民が共同体を作るために参加して、「住みたいまちづくり事業」を進行している。

三徳洞に降りかかった再開発の風は、その年に予備社会的企業、地域児童センター設立などは、コミュニティ空間の意味の再定義とコミュニティ・ビジネスの摸索を通じて事業である。それぞれの事業は独立しており、互いに連携してコミュニティ内での循環構造を構築している。例えば、大邱エスパスは三徳洞住民に雇用を提供し、水生植物などを販売している。ピーストレードの土工芸事業は陶磁器とエスパス水生植物の容器を製作している。また、ピーストレードはコーヒー販売で得た収益金の一部を三徳洞老人大学の運営費で使い、希望自転車製作所のツアーバイクは大邱エスパスのレンタルバイク事業で使われている。

もちろん、三徳洞で進行されるコミュニティ・ビジネスは、多次的で実験的な形式を帯びているのでさまざまな評価があるが、コミュニティ・ビジネスとくみは三徳洞まちづくりにおける持続可能性の模索する他の実験過程で見なければならぬ。



上 市内バスを改造した三徳洞子供移動図書館
下 大邱エスパスが栽培している水生植物

れまで危機感のなかった三徳洞まちづくりに対する住民から様々な評価をうみ、新たな方向を模索するようになった。10年間継続した三徳洞まちづくりの取り組みの成果を、巨大資本の一方的な介入から守り、持続性を担保するためには、それまでのまちづくりを新たな組織へ再構築し、コミュニティの体系化の必要性が高まった。

まちづくりの拠点としての空間管理と雇用創出を結合し、利潤がまちの中で循環

三徳洞まちづくり事例の示唆する点

三徳洞まちづくり事例からは、まちの本質的な多面性が垣間見える。人の空間の記憶は、空間そのものの記憶よりも空間を媒介とした人生の記憶である。三徳洞は、70年余りの時間をかけて、漸進的に空間の変化が起きている場所だ。そして、そこに住んでいる人々の変化も徐々に起きた。地道な変化の中で絶えず調整されてきた、その蓄積が現在の三徳洞の姿だ。

まちづくりは、まちのコンテキスト(文脈)の十分な読み取りから始まらなければならない。行政が中心であっても、専門家が中心であっても、市民団体が中心であっても、十分な読み取りは、まちづくりの出発点だと思ふ。まちのコンテキストの読み取るということはすなわち、まちの空間と人の両方に対する理解を深めて、まちの資源と脈絡を理解することだ。外国の事例や、他の地域事例を分別無くコピーし、そのままプロジェクトや事業として実施することは無

謀である。これまでのまちづくりの失敗は、こうしたまちのコンテキストの読み取りを省略してしまったことに起因すると考えられる。

三徳洞まちづくりは、初めは充分なまちのコンテキストの読み取りをしていなかったが、06年再開発問題を契機にまちのコンテキストを真剣に読むようになった。まちを人文学的に、社会学的に、あるいは文化生態学的に読んでいくことで、まちで広がる人生の多様な問題がなぜ発生するのか、そして住民はそれをどのように自らの経験で解いていくべきかが分かる。地域の個性を活かしたまちづくり事業が、住民の積極的な支援で推進されることを期待したい。

参考文献

김종민・김민희 (2010), 「들이 마을 것이 답을
찾아주세요」 (덕구三徳洞まちづくり) ?, 한울
출판사
三徳洞まちづくり Blog (<http://cafe.naver.com/samduckdong>)



イギリスの都市再生 - ショアディッチ地区の事例から

「生活の質」の向上に取り組んだ最衰退地区の10年間

野口 琢生 (早稲田大学 大学院)

イギリス・ロンドン東部のショアディッチ (Shoreditch) 地区は、かつては全英で最も衰退の進んだ地区の一つであった。

ショアディッチは、19世紀から家具や皮革製品、衣料品などの製造を行う中小企業が集まる軽工業地域として発展し、住宅と小工場の混在する地区であった。

イギリスでは70年代に産業構造の転換に伴う工業の衰退などによって、経済と社会の停滞のために、英国全土で産業革命以来の工業都市が衰退し、中心市街地問題の悪化と空洞化が深刻化した。

ショアディッチ地区でも工場にかわって共同住宅が立ち並んだが、住民の流出が進み、かわって移民居住者が増加した。その後90年代までに徐々に荒廃と放棄地が増加して、空き部屋や空き倉庫が目立つようになり、地区環境や治安の悪化が進んだ。

90年代に発表された衰退状況調査 (所得や雇用、教育、健康、環境、住宅、犯罪な

どの地区ごとの統計データを指標化したもの) では、ショアディッチ地区は全英でも特に状況の悪い地域の1つと評価された。特に失業率が高さは深刻で、2005年の段階でも労働人口のわずか39%しか常勤の仕事を持っておらず、失業率はロンドン全体の2倍を超えていた。

98年以後のブレア政権下では、都市再生が重要な政策の1つとなった。政府からは広く都市再生のための一括予算が組まれ、特に衰退の著しい地区に集中的に投入された。中央政府からの予算は都市再生を行う各地区の指定された非営利の民間団体に直接投入され、その非営利団体が、地方自治体や企業、他のNPO、社会的企業・団体と戦略的パートナーシップを組み、予算を配分し、都市再生のプロジェクト全体の主導・調整する役割を果たした。

ショアディッチ地区は、2000年に政府から都市再生の対象地域に選ばれた。ショアディッチ地区では、「ショアディッチ



上 中高層のアpartメントが立ち並び、様々な出身地の人が住んでいる。

下 工場や倉庫も多く、古い建物が多い。現在では空き家になっていた建物を現代化してアトリエやワークスペースとして利用されている。

チ・トラスト (Shoreditch Trust) が、多くの市民や団体と地域戦略パートナーシップを組み、長期的に社会的環境的な利益をもたらすことのできる持続可能な取り組みを実施することで、都市再生プロジェクトを主導・調整する役割を果たした。そして、職業訓練や教育向上、社会的企業の起業支援、住宅や職場のリニューアル、食習慣の改善、健康状態の改善、犯

罪抑止、地区情報提供など、幅広い領域で様々なプロジェクトを次々に仕掛けて、住民の「生活の質」の向上を目指してきた。2010年までの10年間、こうした数多くのプロジェクトを通じて、徐々に住民の生活の質が改善されてきた。

職業訓練のために開設されたコミュニティ・カレッジでは、若年層の教育と職業訓練に力を入れており、多様な課目を設置



左上 雑然としていて治安の悪かったリージェント運河。現在は環境が改善され、水辺に人が集まるようになった。



右上 ショアディッチ・トラストのオフィスでは、地域の様々な情報を提供している。

左下 子どもが集まるショアディッチ・パーク。グラウンドや遊具もある緑が豊かな公園。

右下 ホクストン商店街。国際色豊かで、南米やアフリカの商品を扱う店もある。



上 様々な職業訓練コースを設置しているハックニー・コミュニティ・カレッジ。

下 ジョブ・トレーニングを実施しているレストラン。パーのような雰囲気です。テラスもあり、おしゃれな店内だが、リーズナブルなお店。

している。地区外からも若者が集まるようになっていく。地区内にはコミュニティ・カレッジと連携した職業訓練のレストランがあり、安価でおいしく、バランスのよいメニューを提供しているほか、エコをテーマにした食事を提供し、評判を呼んで地区外からも人を集めている。

ホクストン・スクエアやリージェント運河など、ショアディッチ地区の中には、人々から放置され、朽ち果てかけていた場所があり、落書きやごみなどで環境が悪く、治安も悪化していた。ショアディッチ・トラストは、空間の歴史性や形状を残しつつも、空間の修復と整備が行い、再び人々が集まる場所に回復しつつある。空いたまま放置されていた数多くの住宅や倉庫なども改修して現代化し、再市場化が進んでいる。

地区内にあるショアディッチ公園も、かつては売春婦の集まる治安の悪い場所であった。しかし今では治安が回復して、地

区の子どもが集まり遊ぶ場所になっている。毎年夏にはこの公園を中心に、「ショアディッチ・フェスティバル」が開催されており、国際色豊かなこの地区の住民達がそれぞれアートやダンス、音楽、文芸などで表現しあい、盛り上がりを見せている。運営はショアディッチ・トラストが中心になり、地区住民が参加して企画が行われ、多様な文化を体感的に共有しコミュニティをつなぐ機会になっている。コミュニティを巻き込んだイベントとして全英でも高い評価を得ている。

こうした取り組みが10年間継続して行われた結果、地域の治安が回復し、徐々に生活の質が向上するとともに、外部からも人が集まるようになってきた。

00年代後半に入ってから、この地区の古い家屋や倉庫を現代風におしゃれに改修した店舗やオフィス、アトリウムなど人気を集め、アパレル・ファッションが徐々に集まるようになっていった。現在ではロンドンの流行の発

信地の1つになっている。その後、ほかの創造的な産業も集まり、現在ではIT産業の拠点としても注目を浴びている。

キャメロン首相は2010年11月に「私たちの望みは、東ロンドンエリアを世界のテクノロジの拠点の1つにするために、ショアディッチ地区の持つ創造性やエネルギーと、オリンピック・パークの持つ大きな可能性を引き合わせることで」と演説し、ショアディッチを含むロンドン東部を「世界のIT技術の中心地」にする計画と発表した。国際的IT大手の進出なども予定されている。

12年のロンドンオリンピックの会場の1つになることも決まっており、すでにオリンピック・パークの建設が進んでいる。

10年前まで衰退の著しかったこの地区は、いま世界から注目を浴びる場所へと変わりつつある。



住まいの仕事塾 アクティブ居住スタイルへ

早田 宰 (早稲田大学 教授)

西川口の新しい居住スタイル

西川口にアクティブな居住スタイルが生まれつつある。元気な人が元気なまちをつくる。地域再生の元気人材ハウスをまちでつくる。

それをサポートするのが「住まいの仕事塾」だ。連続講座を2010年度コ・ラボ西川口で開催した。住宅の仕事といえば、通常、設計、施工、リフォーム、インテリア、園芸など工事関係の種別が浮かぶ。資格では、宅地建物取引主任者、マンション管理士、福祉住環境コーディネーターなどがある。高度化する住まい手のニーズにまちはどう対応するか？

高度化する住まいのニーズと仕事

近年新たな住まいの職能が次つぎに登場している。たとえば、「ハウジングライフ(住生活)プランナー」は、退職後の高齢者の移住・住み替えを、本人や家族の住生活ニーズ、金融等の総合的観点から支援する。

また、「公認ホームインスペクター(住宅診断士)」は、中古住宅の流通、売買、老朽度の判定、流通の住宅診断のスペシャリストである。建築、不動産に加えて金融の知識が要求される。

これらに共通する特徴は、①人口減少時代の社会経済システムへの積極的対応、②住まい手を中心にしたサービスの総合化、

③住宅ストックを流通させ、社会資本として整備する視点、④金融や福祉などハード、ソフトの総合、⑤解決を導くプランニングやコーディネートの高度なスキル、などの点である。

アクティブ居住

ニーズと仕事の変化は、実はまだ最初のステップにすぎない。「住まいの仕事塾」では、次の世代のキーワードとなる「アクティブ居住」をテーマにした。その中核が「職と住の関係づくり」と「地域に根ざした居住」の考え方である。

「住む」と「働く」は生活の中核である。共稼ぎや自宅で仕事をするなどライフスタイルの多様化時代に職住をつなぐコーディネートの仕事が重要である。たとえば、職業訓練中の世帯や離職者向けの公的住宅の供給、家賃補助の相談体制の構築等のアドバイスや手続き等のサポートがある。

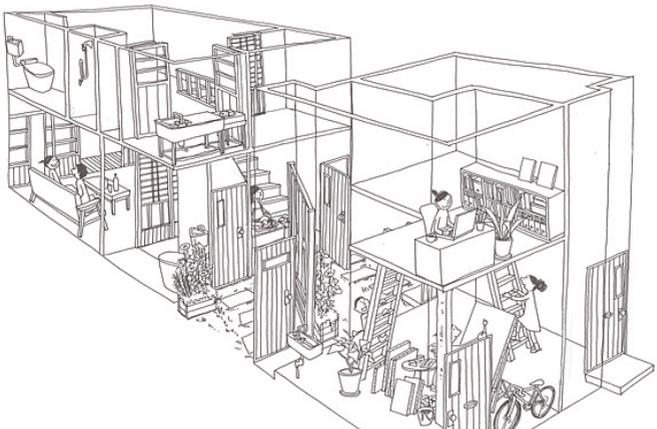
また、「地域に根ざした居住」は、地域で

の支え合いのしくみと住生活の関係づくりである。子育て、ひきこもり、介護まで幅広い。行政に頼らない自力の問題解決と、いざという時の隣人や関連機関との橋渡しが期待されている。

公共の福祉、セイフティネットの視点が重要であるが、支え合いをアクティブな居住スタイルに転換することが大きな狙いである。

ケース1 外構と共有空間のデザイン

それを模索しているのが「仕事塾」である。2010年12月14日、住まいの仕事塾の一回目が開催された。テーマは、「住まいの個性があふれだす共有空間 外構と共有空間のデザインを考える」で、講師は、阿部俊彦さん(建築家・LLC住まい・まちづくりデザインワークス)と岡田昭人さん(まちづくり専門家・西川口まちづくり合同会社)。阿部さんから、住まい手主体の集合住宅の歩みについてわかりやすく説明してい



「大森ロッヂ」のイメージ図
(大田区大森西3丁目)



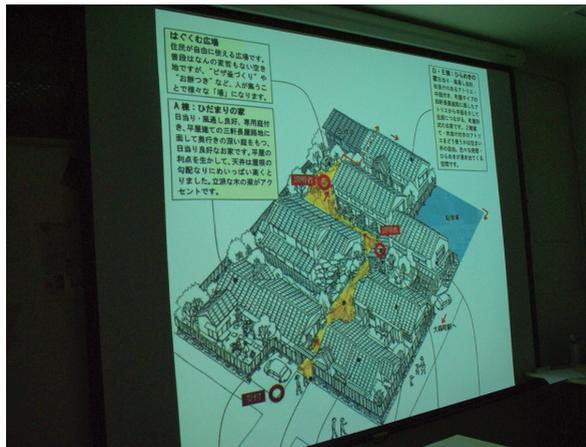
上 ゲストハウス・イン・西川口（蕨市南町2丁目）

右 比嘉孝さんのゲストハウスの講義



上 西川口シェアハウスAEDEN（川口市西川口1丁目）

左 岩佐修さんのシェアハウスの講義



上 講師の阿部俊彦さん

左 住まい等主体の集合住宅史の講義

ただいた。長屋を現代に再生する「大森ロッヂ」の事例などから、建築のデザインとコミュニティづくりというハード・ソフトのセット支援の意義を再確認した。

ケース2 ゲストハウス

2回目は12月18日、「志縁コミュニティをマネジメントする」をテーマに、講師は、比嘉孝さん（J&Fプラザ）。「ゲストハウス・イン・西川口」は日本人と外国人が半々に住む。運営の秘訣は、住まい手の自覚をしっかりと促すことがポイント。たとえば、「共有空間で食事をしたらお皿をきちんと洗う」など、管理人が注意しなくても、住まい手同士で注意しあえるコミュニティをつくるのが重要である。そうすれば、富士山ツアー、Tシャツづくりなど自然と楽しい企画が住まい手の中からあふれ出してくるといふ。

ケース3 シェアハウス

3回目は、1月11日、「創造性を高めあうプライバシー 距離感・壁・緩衝空間のデザインを考える」をテーマに、岩佐修さん（株式会社シェアスタイル）と新井常夫さん（上新建業株式会社・西川口まちづくり合同会社）が担当した。リノベーション（改築）による「西川口シェアハウスAEDEN」を例に創造的なシェアハウスについて考えた。質を維持する上で、インテリアデザイン、居住者集め、居住者間のパーティや英会話などのきめ細かい仕掛けの重要性を指摘する。

ケース4 キーワーカー住宅

「職と住の関係づくり」と「地域に根ざした居住」はアクティブ居住の柱であると同時に、地域活性化にも寄与する。住む人働く人を増やすのはまちづくりの正道である。できれば地域に住んで働く人を増やしたい。アメリカでは「リブ・ワーク」といふ。

その公益性に着目して制度化しているのがロンドンの「キーワーカー住宅」制度だ。キーワーカーとは、公共サービスに従事する専門職のスタッフで、医療・福祉、ソーシャルワーカー、教育、警察、消防、まちづくりの専門家などの公的な仕事をしている人のことである。その専門スタッフが仕事のエリア地域の中に住むためのサポートつき住宅である。

家賃は民間の80%と安い。仕事がスムーズになる。仲間もできる。もちろんプライベート生活にゆとりができる。賃貸から売買へ移るときの支援もある。このようなしくみが日本にもあつていい。「仕事塾」はそこを話し合ってきた。

プロジェクト・ハウス

「仕事塾」で考えてきたのが、「プロジェクト・ハウス」という新たなしくみである。地域再生のプロジェクトを入居者がおこなうことを条件に募集する。皆元気で、いつ



プロジェクト・ハウス1号「栗原ハイツ」



もわいわいやっている。そこからアイデアやアクティブな活動が飛び出してくる。その貢献度に応じてポイント化し家賃を補助する。家賃減額の差額は地域のまちづくり基金や寄付から捻出する。商店街が食事や買い物を割引してもいい。

この民間と公営住宅の中間的な「地域再生の元気人材ハウス」の住宅を地域ぐるみで供給するのが狙いだ。いわば企業の社宅ならぬ「まちのコミュニティ住宅」である。社宅であれば、仕事を辞めたら部屋を出なければならぬが、プロジェクト・ハウスはあくまで自発的な活動を尊重したもので出る必要はない。仕事が忙しいときは地域貢献活動をしなくてもよい。通常の家賃を払えばいいのである。

プロジェクト・ハウス1号に入居した千葉俊介さんの記事を見ていただきたい。支援や寄付が集まれば共有スペースを整備するつもりだ。

次世代人材育成のまち
「プロジェクト・ハウス」は実はつくる側のチャレンジでもある。顧客のニーズは多様化し、必要な知識とスキルはめまぐるしく変わっている。これからの「縮む世界」の発想に専門家が頭を切り替えなければならぬ。

働き方、キャリアの考え方は新時代を迎えつつある。終身雇用から転職によるキャリアアップも広がってきた。優秀な人材はその能力を適正に評価してくれる場所に移っていく。職業訓練も長期の積み上げ方式から、短期かつ到達度を明確にしたブラッシュアップ（学び直し）教育が求められる。選択される会社、選択される地域となるためには、次世代を見越した「キャリア・ビルディング（可能性の構築）」が必要である。「住まいの仕事塾」はアクティブ居住をテーマに住まい手と専門家がともに成長する場である。



住まいの仕事塾に参加して

「これからこそ
役に立てる場所がある」

堀和 光二郎

ようにしたり、国内でもマンションの設計段階から住民が関わったり、古い建物を自分たちで改修したりする例を聞かせていただき、この西川口での可能性を考えてみたくなった。

またゲストハウス、シェアハウスについての講義は、今までのイメージが変わった。ゲストハウスはウィークリーマンションのようなイメージだったが、実は外国の留学生にとっては非常に便利な場所で、情報

をもらえたり日本人の住民と触れ合う場があったりするようだ。シェアハウスはお年寄りが一人の持ち家をシェアするか学生が家賃を安くするために友人とシェアするシェアールの感じだったが、最近は一人ではできない高級な居住空間をつくるという積極的なものになっているそうだ。

10年間、仕事から離れていると街も人も進化していくことを痛感したセミナーだった。他の参加者は若い人ばかりだったので感じ方は全然違うと思うがこの西川口がお年寄りも若者も、男性も女性も、日本人も外国人も面白いと思える場所づくりができたらいいなと思った。まだ私にも役に立てる場新たな見つけ方がある。

堀和光二郎（60）元建材加工会社経営、認定NPO法人川口市環境会議理事、エコービースくらぶ代表ブログ：<http://blog.canpan.info/koketuan/> H.a.：<http://ecopeace1000yen.edisc.jp/>

まちづくりを仕事として考えていけるということで今回のセミナーに参加することになった。はじめのうちは昔とつた杵つかでマンションのリフォームや店舗改装の現場を見たり話したりしていたが、スケルトン（何もなし）状態から完成まで約2週間で依頼先の要求通りに仕上げるのはかなり骨の折れる仕事だと思った。

後半はまちづくりの部分で、ニューヨークの無人となったビル街をNPOが住める



プロジェクト・ハウス 「栗原ハイツ」発の 新まちづくり

千葉 俊介（早稲田大学 社会科学部）

少子高齢化が進み都心の再開発も未だに続く中、郊外都市は岐路に立たされつつある。都市機能を解除してその残骸を残す「冷たい郊外」になるのか、それとも郊外都市ならではの新たな価値を創造して発信する「暖かい郊外」になるのか。

私は、トラックで様々な物流の中を回り道してきた。回り道の上で大学に戻り、このプロジェクト・ハウスにも出会えたので、自ら地域に根差して川口を暖かくしていく

実践を行いながら学んでいきたいという気持ちを持って持った。私が栗原ハイツ、さらにはこの西川口を拠点にしてやりたい事をする3つ述べたい。

地域内物流

川口は広い。JR沿いの南部（川口・西川口）しか思い浮かばない方も多いが、緑多い北部（木曽呂・安行・神根）には様々な魅力がある。鳩ヶ谷市との合併も決定し

て北部の可能性が期待されるが、北部と南部の結びつきは弱い。両者の交流を活発にする事が川口を暖かい郊外都市にする鍵だと考えた。

緑のまちへ

そこで私は新しい居住者が多い南部に川口の魅力を届けようと考えている。青果（特にハマボウフウは有名・麦味噌・切花・染織・铸件といった地域資源をそのまま提供するのでは無く、一捻り二捻りして新しいものを創りたいと考えている。例えば「アーティファクトがデザインした铸件花器に切花を付けて、染物でおしゃれに包んだギフト」や「花の香りが楽しめるバスオイル」他、去年コラボ西川口でプロデュースした様なB級クルマ等も練り上げていきたい。

それには既存の物流システムでは限界がある。トラックで地域をフレキシブルに回りながらその地域の方々と結び付きを強めて、このプロジェクトを進めていく新たな

地域物流のスキームを組む事が肝要と考えた。地域がより一体となるきっかけを作る事も大きな糧になるからだ。また、周辺の道の駅や高速SAでは川越・草加名物が主流で、川口名物は見ることが出来ない。単に一過性で終わらないものを創る事が出来れば、今後はこうした所にも展開して川口の逆襲が出来ると考えている。

地域・パトロール

民間の地域防犯活動がトレンドだが問題もある。例えば行政では専従者の人件費ないし警備会社への委託コストは将来的に不合理と言える。町会でも車両購入助成は拡充するものの、活動継続性・車両維持費の面で難がある。企業で行われるパトロールは大手事業者主体で、ドライバーは受身になりがちである。

ここで感じていた事が、地域内を配達する事業者がいつでも出来る事はないか、若しくは地域の事業者が時間の空いた時に

来る事はないかの2点だ。例えば宅配のついでに高齢者の安否確認をしたり、登下校時のパトロールや深夜早朝の資源持ち去り防止をしたらどうだろうか。また、配送中にほんのちよつとした事から児童虐待や近隣トラブルの兆候が掴めるかも知れない。地域の事業者がAED資格を取り、機材を車に積んでいたら命の危険を救えるかも知れない。各事業者が連帯して主体的にこうした活動に取組み、そこから行政・住民・事業者が共栄していく持続的なサイクルが産まれれば、大企業や大都市による強者の論理、格差の時勢にも屈しない街を築けるのではないかと考えている。

住んでみて2週間。住民として何気なくいろいろ街の話を伺うと悲観的な声が大変多い。実は駐車場を借りるにも苦労した。西川口は賃料が高いので川を渡った蕨市で問い合わせた所、「西川口の方はちよつと」と言われ大変ショックを受けた。しかし、「人

は石垣、人は城」だし「為さねば成らぬ何事も」である。このプロジェクト・ハウスに人材が集まって熱源となり、この街を暖かくしていくきっかけが進むことを切に願う。



上 プランターで育てた麦はトラックで運び配っている。

右 地域内物流のプロジェクトの仕組みを考えているところそうだ。





粟原ハイツに住んでみて

プロジェクト・ハウス 始動

千葉 俊介 (早稲田大学 社会科学部)

粟原ハイツに住み始めて3週間がたった。最近やっと居住環境が整いはじめたところである。築30年を過ぎてきているためか設備の古さがまだ目立つが、これから少しずつデザイン・改修していこうと考えている。

引越してから、粟原ハイツの居住者と何度も顔を合わせた。この住民の方はみな明るい。外国籍の方もおり、コミュニケーションを取るのはかなり大変だが、身振り手振りと絵で今のところはなんとかしている。先日、アパートの敷地が散らかっていた。

たので掃除をしたところ、その様子を見た住民の方からお菓子をいただいた。コ・ラボ西川口のことやプロジェクトのことを話すこともできた。ちょっと暗い建物とは対照的に、人々は温かく、少し安心した。

今は川口の麦プロジェクトで、我が家のベランダでも麦を育てている。ゆくゆくはこのベランダの柵を崩してウッドデッキにし、地域の方々に開放し、育て麦を見ながらゆっくり話のできるオープンカフェのようなスペースにできたら、と思っている。



粟原ハイツでもベランダで麦を育てている。このベランダをもっと活用して地域の方々に開放する空間を整備したい。



学生が粟原ハイツを見学！

学生が見たプロジェクト・ハウス

原田 明裕 (早稲田大学 社会科学部)

2010年秋、粟原ハイツの見学会が行われた。今回の見学会の参加者は早田先生とゼミの学生。学生は粟原ハイツを見るのは初めてだ。

この粟原ハイツは、「西川口を盛り上げた」「まちづくりを通して地域の人の役に立ちたい」という志を持つ人達が集まり、居住する人が住むプロジェクトハウスに改修して、プロジェクトの拠点になる。設計や施工も居住者参加で行う予定だ。

西川口駅から徒歩5分の場所に、その少し古いアパートはある。周辺は町工場や駐車場で、少々殺風景に思われた。その一室に入ってみる。家具は何もなく空き部屋だ。学生は個々に室内を散策し、利用方法を思い描く。

「この居間はミーティングルーム兼 スタジオにしてみてもは？」、「中庭はどうしよう」「水を張ったら？」、「地域の子供たちの遊び場にしてみたらどうかな？」、「かつて川口特



学生からは、プロジェクトハウスへのアイデアがどんどん出された。

産だった麦を育てたりどうだろう」「通りに面した側壁には、アートみたいなものを施しても面白いかもしれない」
まだ何も無い部屋を目の前に、学生から多種多様なアイデアが浮かぶ。ああしよう、こうしようのと留まるどころを知らない。皆、いっばしの建築家の口ぶりである。
西川口の未来を担う人材が、このハウスから育っていくのが楽しみだ。



麦プロジェクト

川口の麦を復活させよう

江田 佳那子（早稲田大学 社会科学部）

背景

かつて、川口市は荒川水系と江戸への交通の便の良さから、麦を栽培し麦みそを生産していた。江戸時代から大正期にかけては、田中徳兵衛商店を始めとする8軒の蔵元があった。しかし、鑄物産業の台頭や技術革新から川口味噌の需要は減少し、蔵元もすべて閉鎖してしまった。

このような現状を踏まえ、川口産の麦

おり、味噌問屋として独立なさったそう。これが現在の(株)アライの起源となっており、社長も川口麦みその復活に向けて動き始めている。

また、NPO緑を創る会の川本さんご夫婦は、以前から味噌に注目し、おかずみその開発をなさってきたそう。また、地元産の素材のみでは実現してないが、いづれは川口麦みそを使つての製品化を目指している。

川口麦みそは①麦の生産、②みそへの加工という一次、二次産業の側面を持っている。今後、三次産業の側面であるサービスや販売、流通を取り入れれば、六次産業化への発展が期待できる。

また、調味料である味噌は様々な種類の料理に応用することができる。現在「B級グルメ大会」にも出品し、地域の味の開発に役割を果たすことが期待できる。

地域の味として、新たな地域の産業創出も見込める川口麦みそ復活に向けて、少し

それを使用した麦みその復活を目指したプロジェクトが始動させることになった。

麦を育てるプロジェクト

川口市でかつて育てられていたと考えられるのは、味噌に使用される大麦またははだか麦だ。そこで、現在改良された「トノヨカゼ」という品種の種を大分県から取り寄せ、協力していただける方を募り、畑と

ずつ取り組みを広げていきたいと考えている。

武州ムギ坊―浜味噌風味―開発

麦を育てるプロジェクトと並行して、昨年11月28日に開催された川口B級グルメ大会に出場するため、麦みそを使用したグルメの開発を行った。また、麦みその復活はできていないが、川口麦みそをPRすること、川口の特産品を使用することという2つの条件を念頭においた。そのため、シ

プランターで栽培を始めた。

現在、川口市内、鳩ヶ谷市の畑をお持ちの方（田畑伸一さん、伊藤信男さん、早船源一郎さん、肥留間広幸さん）にご協力いただいて、6月くらいの収穫を目指して栽培している。

昨年11月中旬には、早田ゼミの学生が伊藤さんの畑の一部に麦の種を撒いた。さらに雑草が生えている状態だったが、草を抜き、耕す作業を全て手作業で行った。学生にとっては慣れない作業で少し大変だったが、半日ほどで畑らしくなった。どれほどの収量があがるのかまた未知数だが、川口の麦復活への第一歩を踏み出している。

麦みそ復活プロジェクト

川口の麦を使用した麦みその蔵元復活に向けて、私たち早田ゼミと地元の企業、市民の方との取り組みが始まっている。

川口市で酒卸業を営む(株)アライの先代社長は、田中徳兵衛商店で番頭として働いて

ンブルな餅をベースに、川口特産の武州浜防風を味噌に練りこんだんだ。また、味噌は埼玉県産にこだわった。大会当日には1000食を売り切り、好評価をいただくことができた。

この先も武州ムギ坊だけではなく、武州浜防風を練りこんだ味噌についても、新たな川口グルメ開発の一案として、発展させていきたい。



上 川口B級グルメ大会に出品した「武州ムギ坊―浜味噌風味―」。好評を得ることができ、川口麦味噌をPRできた。

下 麦味噌とハマボウフウをつかったメニューの開発会議。地元企業と学生が実際に作りながら意見交換した。



麦の種をまきに

川口の麦復活に向けて

松井 威 (早稲田大学 社会科学部)

雑草抜きが終わり、ついに種まきへ。伊藤さんからやり方を教えてもらいました。耕し、畦道作り、種まいて、土で隠してという作業を縦5m×横5mの畑に、みんな役割を分担して種まきをすすめていく。くわの作業は腕パンパンになり農業の大変さがわかった気がした。

みんな力を合わせ徐々にスピードUP。3時間くらいかけて種まき終了。そのころにはすでに服や靴はドロドロ。大きくなるんだよと願いを込めて安行の畑を後にした。その日にコ・ラボ西川口にもプランター

当日はあいにくの小雨。麦の種をまくのはコ・ラボ西川口の近くと聞いていたが、実際には車で30分くらい先の安行地区にあり、ゼミ生の千葉さんの車に乗せてもらって7名で出発。現地では元川口市議で、現在まちづくりコーディネーターとしてらっしゃる、安行蕎麦の里の伊藤信男さんと合流！この方が麦の畑を貸していただいた人だ。この時には雨は止み、くわを渡されてテンションUP！

まささらな畑に種をまくつもりでしたが、なんと雑草がボウボウ。伊藤さんに「大体抜いたら種まき始めるよ」という声を合図に雑草抜き開始！みんなで力を合わせ進めていきます。その際、ソバと麦の育て方は全く違うことや昔の川口は麦が盛んであったことなど伊藤さんから貴重なお話をしていただいた。



麦の種をまき終えての一枚。
この麦が無事に育ち、川口の麦が復活することを願う。



川口B級グルメ大会に参加

武州ムギ坊 - 浜味噌風味 - 参戦！

渡邊 恵理 (コ・ラボ西川口)

11月28日のB級グルメ大会当日、普段は人通りの少ない道には早朝から準備をする人があわただしく動き、テントや機材が設置されていく。活気にあふれていた。

出展者のテントにはそれぞれの思いの詰まったメニューが並ぶ。コ・ラボ西川口も川口で昔から生産されていた「麦味噌」を使った五平餅「武州ムギ坊」を販売した。五平餅に川口特産の浜防風を練りこんだ麦味噌のたれをつけた和風B級グルメで、大会に向けて麦味噌とハマボウフウの配合の

試作を重ねた自信作である。麦味噌の復活を願い懐かしい味が仕上げたが、幅広い年齢層に受け入れられたようで、イベント開始直後から長い行列ができ、閉会の15時前に無事に1000食完売することが出来た。多くの人に並んで頂き、調理は休む間もなく、てんでこまいであったが、終わった後の達成感は格別であった。

食べていただいた人の中で「とてもおいしい」と褒めてくれた人の笑顔が印象に残っている。喜ばれるとそれまでの苦労も吹っ

飛んだ。その一言でまたがんばれる。元氣になれる。この元気がまちづくりを支えるエネルギーになるのではないだろうか。

西川口の新たな名物となったB級グルメ。西川口もB級グルメのように身近で、誰にでも愛されるようなまちになることを願う。また、このB級グルメ大会をイベント当日だけでなく日常のまちにどのように発展、展開させるかを考えたい。



自信作のハマボウフウを練り込んだこの麦味噌のたれは、懐かしい味がして美味。



社長との交流会と まちづくりインターンシップ

まちが若者を育てる取り組み

野口 琢生（早稲田大学 大学院）

どの学生もこの交流会を通じて、徐々に「働く」ことへのリアリティを少しずつ感じているようだ。

まちづくりインターンシップ

2010年夏からは、専門学校やNPO、地元企業が連携してインターンシップ（職業体験）を開始した。西川口まちづくり合同会社では、7月に東京国際ビジネスカレッジから5人の学生を受け入れ、2週間の職業体験を実施した。期間中、学生は合同会社スタッフ指導の下、まちに出て西川口周辺の建物や商業状況の調査、西川口地区の3Dシミュレーションマップの制作を行った。

秋以降もこれまで計6回約20名のインターン生を受け入れてきた。西川口の調査を行い、まちづくりのための基礎データを収集し、まちに還元していくことを目指しており、学生にとっても働くということを考える良い機会になっている。

地元社長との交流会

NPO学生キャリア支援ネットワーク（橋本光生理事長）が主催する「社長との交流会」が2010年春から始まった。現在は毎週1回のペースで、平日夜に就職活動が盛まった大学生や専門学校生が西川口に集まり、川口青年会議所や県内企業の協力のもと、地元企業の若い社長さんをゲストに招き、仕事に関する話をお聞きしている。

社を経営されていること、川口の中小企業でありながら日本全国、さらには世界を相手に仕事していること、川口の良さやまちづくりの活動など、幅広くお話ししている。

お話のあとで、今度は学生から仕事や自らの就職活動のことで質問や相談が出て、社長さん方とやり取りが続く。

正直なところ、お話ししていたいた「仕事」の大変さと喜びを、学生には少ししか理解できていないかもしれない。しかし、

早稲田大学の科目「参加のまちづくり」の学生が企画したこの「西川口宝探しツアー」は、拡張現実（AR）という技術を用いたアプリ「セカイカメラ」を用いたイベントだ。

拡張現実とは、現実の世界にコンピュータなどを用いて情報を付加提供した環境である。セカイカメラは頓智ドット株式会社が無償で提供する携帯アプリで、携帯電話のデジタルカメラによって目の前の景色が画面上に映し出された上に、その場所の建物や通りに関連する「エアタグ」と呼ばれ

る付加情報が吹き出しのように浮かんで重ねて表示される。

西川口宝探しツアーでは、セカイカメラ対応の携帯電話を持っている人を対象に、セカイカメラを利用して拡張現実（AR）で宝探しをした。街の各所に設置したエアタグからキーワードを発見し、西川口の宝を発見するというイベントだ。

学生が西川口を歩き回りエアタグを設置するポイントを決め、地元飲食店などにも協力をいただいでキーワードを街中に浮かべていった。



地元経営者団体に、セカイカメラを西川口宝探しツアーの企画を説明する学生。



西川口バーチャル 宝探しツアー

～拡張現実を体感せよ～

西川口ストーリー 編集部



- 左上 社長との交流会。毎回地元の中小企業の社長さんを1人お呼びし、社長さんを囲んでお話を聞く。仕事をするとはどういうことか、考える機会になっている。
- 右上 まちづくり合同会社へのインターンシップで学生がパソコン作業を行う。まちへ出での調査も行う。
- 下 学生が制作した3Dシミュレーション。こうした取り組みを西川口に還元していきたい。

今年冬からは、西川口地区では飲食店やコンビニエンスストアでもインターンシップの受け入れが始まっている。

まちが若者を育てる

近年若者の就職をめぐる状況は厳しくなっているほか、ニートや引きこもりなどが社会的に大きな問題になっている。

「社長との交流会」は、働くことについて聞き、考えることで、「まちづくりインターンシップ」では、まちに出て仕事し働くことを体感することで、それぞれ若者の就労と自立へつなげようと企画されている。地元企業の協力を得て進める若者自立支援の取り組みとして県からも評価されているそうだ。

何より若者がまちに出て、人と関わり、経験を積む。そしてまちが若者を元気にし、育てる空間になる。出ていく場所のない若者にそんな場所を提供できるまち「西川口」になりつつある。

またこの企画をTwitterでつぶやいたところ、携帯電話会社から反応があり、これをきっかけセカイカメラに対応するスマートフォンへの購入者に企画告知など、ご協力をいただいた。

拡張現実とはバーチャルリアリティと対の概念を持ち、強化現実とも呼ばれる。現実世界の活動を支援する技術として注目されており、観光案内や地域情報発信に利用されようとしている。拡張現実での情報発信が西川口のまちを変える日も近いかもしれない。



トレジャーハント in 西川口

小学生、中学生、大学生が地域を歩く

鍋木 亜紗実 (早稲田大学 人間科学部)

2010年8月8日午前10時、真夏の西川口を小学生、中学生、それから大学生という奇妙な組み合わせが、何グループも歩いてきた。小学生の手には何やらマップらしきものがあり、「次はどこを宝を見つけに行こうか」「これ、どこにあるの?」と相談中。その横では中学生が「車に気をつけて」「これはあそこへんかな」とガイド役。さらにその後ろでは大学生が「(心の声)中学

生は頼もしいなあ」と、ただ見守るに徹している。これがトレジャーハント in 西川口の風景である。

作るために彼ら自身がまちを歩き、「小学生に教えたい、まちの面白いところ」を地図上に記していった。そして問題を出題してもらいたいお店を選び、依頼しに行った。実は大学生が前もってお店の方と打ち合わせしていたのだが、その際に残念ながら参加を断られたところにも「断ってもいいので、中学生に依頼させてほしい」と無理を言い、彼らは依頼を断られることも経験した。

当企画は、①まちの観察②地域内交流③まちづくりの次世代育成の以上3つをゴールにしている。まちを快適な空間にするためには——①住んでいる人がまちを観察し、まちの良い点、改善点を知ること、②

その後の活動では、小学生の参加者を推定して何グループ作るのか、制限時間内に戻ってくるためには何問つくるのかを話し合い、問題・解答、マップ(問題用紙)を作成した。解答の作成時には「なんでこんな数えるのが難しい問題(上記①問題)作ったの!」と考案者自身が嘆く場面や、絵の腕に自信のある子が色とりどりの色鉛筆を使ってマップを描いている場面が見られた。最後の集まりでは、同じような時間帯で、大学生は小学生を演じながら予行練習を行った。

そして本番当日。唯一の中学2年生が開会式を行い、ゲームは幕を開けた。印象的な出来事が3つ。一つ目が、ゲームの最中にまちの人から「何をやっているの?」と話しかけられたこと。二つ目が、中学生の保護者の方から「子どもはこんな活動をしてたんだね」と涙交じりに言われたこと。三つ目が、当企画にご協力いただいた方の後日談で、以前まではよそよそしかった中学生からの挨拶が「〇〇さん、おはよう!!」に変化したこと。この企画で

少のだが、地域と中学生(次世代の担い手)の変化を感じた。

最後に、このイベントは西川口公民館地区連合子ども会の夏休み行事『一泊二日体験教室 in 仲町小学校』の特別企画であり、企画の立ち上げから運営に至るまで子ども会の方の多大な協力をいただいた。また協力していただいたお店の方、仲町中学校の先生方、保護者の方々にも、この場を借りてお礼申し上げます。

最後になるが、このイベントは西川口公民館地区連合子ども会の夏休み行事『一泊二日体験教室 in 仲町小学校』の特別企画であり、企画の立ち上げから運営に至るまで子ども会の方の多大な協力をいただいた。また協力していただいたお店の方、仲町中学校の先生方、保護者の方々にも、この場を借りてお礼申し上げます。

中学生と大学生の事前の打ち合わせ。中学生は部活などが忙しい中で、何度も集まって企画の準備をした。



上 中学生と大学生の事前の打ち合わせ。中学生は部活などが忙しい中で、何度も集まって企画の準備をした。

下 仲町小学校にはたくさんの小学生が集まり、企画は大成功だった。



一日映画ワークショップ

—レンズを通してまちを観察する—

鍋木 亜紗実（早稲田大学人間科学部）

「はいっ、最後のシーンいきます。3、2、1（声にださずに、振りだけで）1…」

ある日曜日の午後三時、西川口のまちにカメラとマイクを抱えた団体がうろうろと歩いていた。メンバーをみると就学前の子どもから初老の方までいる。どの顔も一樣に、笑顔。一日限りの映画づくりの撮影風景である。

本イベント『一日映画ワークショップ』は、

葉や音楽を兼ね備えている。さらに映画をつくるとなれば舞台を観察し、ある程度の、それも濃密な時間を製作者が共に過ごすことになる。

この『映画づくりによるまちづくり』の運営主体がコ・ラボ西川口 まちの映画プロジェクトである。そして今回の『一日映画ワークショップ』は、住民の、映画をつくることへのモチベーションアップを目的に企画された。

企画の構想自体は2010年夏ごろにうまれたが、今回このようにプロジェクトとして始動したのは11月中旬であった。この頃に早稲田大学参加のデザイン研究所客員研究員の沼田真一さんの紹介で脚本家兼映画プロデューサーの栗山宗大さんと知り合い、「一度やってみよう」ということでイベントの企画に至った。栗山さんは「ニッポン中のまちを映画で元気にしよう!」と03年、映画製作会社Fire Worksを起業し、全国各地で行った「市民参加型映画

コ・ラボ西川口 まちの映画プロジェクトの第一弾企画である。はじめに、「まちの映画プロジェクトとは何か?」「なぜまちづくりで「映画なのか?」について説明したい。西川口西口の階段を下りた所から、線路を背に前方を見る。すると、何が見えるか。時計台、バス停、長く伸びた道路、個人経営の飲食店、チェーン店、交番、銀行、それから空いたままの貸店舗。聴覚に集中す

プロジェクト」で10年度「地域づくり総務大臣表彰」を受賞された。すでに数多くの『映画づくりによるまちづくり』を実践しており、経験に基づいた助言や、この方の気さくな人柄に助けられながら企画の準備が進んでいった。

イベントの対象者を「まちづくり、映画づくりに興味のある人」に設定し、西川口内外に向けてチラシやメール、ブログを用いて宣伝した。10年8月に実施したまち歩きイベント「トレジャーハンターin西川口」



当日は本格的かつ分かりやすい指導・アドバイスをしてくださった栗山宗大氏。

ると、何が聞こえるか。人の足音、案内板の前に立ったチラシ配りの声、自動車の走行音、電車の発着音。匂いは、どうか。お昼時であれば、どこからともなく、おいしいそうな匂いが漂ってくる。全身でその場を感じる。感じ方は人それぞれであるが、それが「西川口の今の姿」である。

この「今の姿」を、住んでいる人たちが自然に捉え、また、現在のまちの姿を後から振り返ることが出来るように、何か形あるものに残すことはできないだろうか。さらに、まちが持続的に発展するためには「人と人のつながり」が必須であるが、このつながりや共同体の意識というのは、協働で何かを成し遂げる過程で強まるものであり（学生時代の部活動や学園祭、地域のお祭りなどを思い出してほしい）、この「協働」という要素を組み込んだ舞台、イベントはできないだろうか。このように考えた結果に思いついたものが「映画」である。映画は、情報の伝達方法として映像や文字、話し言

で接点の出来た地元の中学校、西川口公民館地区連合子ども会、まちづくりに日頃取り組んでいらつしやる地元の方、まちづくりや映画づくりに興味のあるような大学生、そして、実は一日で映画をつくるというイベントは他所でも行われていたのだが、その参加者の方に連絡をとった。参加者の構成を西川口内外、幅広い世代にすること、参加者同士の交流から様々なまちの発見につながることを期待した。

イベントで使用する機材はできるだけ運営者や参加者で揃え、不足分は川口の映像施設SKIPシティ彩の国Visual Plazaでお借りした。持っている機材で気軽に映画をつくることができると、参加者感じてほしかったためである。

約一カ月の準備期間を経て、11年1月9日にイベント当日を迎えた。会場はコ・ラボ西川口。参加者は子どもから大人まで、西川口内外から集まった。参加者と運営者を合わせると40名を越え、会場は満杯、冬



上 受付でくじを引き、3グループに分かれた。シナリオづくり、撮影と取り組んでいくうちに各グループの色がはっきり出てきておもしろい。
下 シナリオづくり開始。「10年後に、ここで会おう」というセリフをどうやって脚本に入れようか、各グループでアイデアを出し合う。

だというの中には少し暑い。

参加者は受付の際にくじを引き、3つのグループに分かれる。そこで出会った人が、今日限りの映画製作仲間になる。イベントの開始時刻は10時。栗山さんによる映画製作講習は二部構成で、第一部ではグループ内の自己紹介や運営スタッフによる西川口の過去現在の説明、そしてグループごとのような映画をつくりたいのかを話し、グループ名を決定した。第二部では脚本の

書き方のレクチャーを受け、各グループで脚本製作に取り掛かった。脚本の内容は自由であるが、長さは5分以内で、脚本に必ず入れなければならないセリフに「10年後に、また、ここで会おう」を設定した。このセリフの意図は、参加者に10年後の西川口を想像してもらい、さらに西川口のどこで会いたいと思うのかを知ることである。また、グループごとでセリフの使い方に違いがあり、それもおもしろいところである。

映画製作講習、脚本製作と続いて次は撮影作業にうつる。まちへ出る前に撮影の注意事項（撮り方、撮影エリアについて）を聞き、いざ出発。カメラ、マイクを担ぎ、脚本に合うような場所を求めて西川口を歩きまわった。あるグループは駅前や公園で、あるグループは道路や馴染みのお店で撮影を行った。どのグループも撮影時はとても真剣で、辺りには少し緊張感が漂っていた。しかし監督の「カット」の声が上がると一転、空気は緩み、カメラが回っていないときはとても楽しそうで、和やかなムードであった。

全てのグループが最後まで作品にこだわり、その結果予定が押してしまったが、撮影から戻ってきた参加者の表情はどれも明るく、やり遂げた感が漂っていた。遅くなっただごめんね。でもどうしても最後まで撮りたくて。」そんなことを言われてしまえば、撮影風景を見てしまえば、「存分に撮ってください」としか言いようがない。

イベントの締めくくりにコンテスト形式の上映会を行った。それぞれの作品を参加者全員で鑑賞し、他のグループがいくつか感想を述べる。そして全部を見終わったら

やつながりの広がりを実感していることが分かった。記述の回答では、普段はただ通り過ぎるだけであった西川口が、意味のある場所が変わったという意見や、昔と違って人が減った、中国料理のお店が増えたという意見、また映画をつくりたいという意見などがあり、映画製作へのモチベーションアップという目的は一応達成できたと評価する。今後は、同様のイベントを継続的に

に行うことでさらに映画製作へのモチベーションアップを図り、少し長い映画を製作したいと考えている。

イベントの締めくくりにはコンテスト形式の上映会を行った。それぞれの作品を参加者全員で鑑賞し、他のグループがいくつか感想を述べる。そして全部を見終わったら、どの作品が一番良かったかを投票してもらった。ここではコンテストの結果に触れないが、3つ作品はどれも個性的であった。お父さんと離れ離れになった少女がネコの力を借りて再開する物語。男の子が一目惚れした女の子に告白しようと科学者に頼るが、そのせいで子どもや大人の姿に変身してしまう物語（最後は大人になって結ばれた）。西川口への居住を考える女性と、西川口から離れることを考える不動産屋さんの物語。この日一日で、西川口の映画が3作品生まれた。

イベント終了後、アンケートをとったり、直に参加者に話しかけたりして感想を聞いた。回答した全ての参加者がこのイベントを「楽しかった」と答え、多数が西川口に対する愛着の深まりを感じ、新しい出会い



上 撮影開始！短い時間で西川口の通りや公園、陸橋などをまわる。お願いで不動産屋を撮影に使わせていただいたグループもあった。
下 最後に記念撮影。参加者もスタッフも集合！

最後に、参加者の方はもちろん、この企画を最初から最後まで支えて下さった栗山宗大さん、沼田真一さん、運営スタッフの学生、今回もご協力いただいた西川口公民館地区連合子ども会、仲町中学校の方々に、心から感謝を申し上げます。



西地区フォーラム 地域の課題を 地域のみんで話し合う

齊藤 玲於奈（早稲田大学 社会科学部）

ブルに移る。ホストは次のラウンドで新たに来た人と、それまでの議論のアイデアやテーマをシェアしながら、さらに議論を深めていく。

西地区フォーラムでは、参加者は各テーブルの席に着くとまず自己紹介を行い、その後テーブルごとに自由に議論していく。20分ほどの1ターン終了毎に席替えを行い、3回にわたり各テーブルの参加者の顔触れが変わり、通常の会議よりも多様で創造的な議論が生まれた。

10月10日、川口市の西公民館で、「西地区フォーラム」が開催された。川口市市民生活と行政との協働推進懇談会の呼びかけで、地域の町会、自治会、市職員、管理組合、NPO団体、まちづくり団体、地域福祉などの関係者約70名が参加し、西地区の自治や協働について2時間にわたり活発な意見交換を行った。

今回の「西地区フォーラム」はワールド

カフェ形式で行われた。ワールドカフェとは、話合いの場をカフェのように気軽に会話を行い、自由にネットワークを築くことが出来る雰囲気にする事で、創造的かつ主体的な話し合い作り上げる手法である。通常、ある質問をもとに、20分〜30分程度の会話が3ラウンド行われる。最初のラウンドが終わると、1人がホストとしてそのテーブルに残り、他のメンバーは他のテー

実際、議論が始まると各テーブルで外国人住民問題、自治会のあり方、孤独死など西地区に存在する様々な問題が浮き彫りになってきた。今までこうした地域の問題は各団体や個人では意識していても、それを訴え、話し合う場が存在しなかった。今回、地域に関係する様々な団体や人々が参加し横断的に意見を交換し、議論することは参加者の方々にとって非常に新鮮で、有益な機会であるとの声が多く聞かれた。



左上 職業や立場、国籍も超え、古くから暮らす人も新住民も、西地区に関わる方々が、西公民館に一堂に会した。

右上 自己紹介に続いて議論が開始。1ラウンド20分の短い時間の中で、西地区のいろいろな情報が交換され、徐々に議論が盛り上がっていく。



左下 テーブルの上のお花を持った人がしゃべることのできるルール。お花が行ったり来たりする。

中下 しゃべりながらも、話題に出たことやひらめいたアイデアを付箋にどんどん書き込んでいく。

右下 テーブルの真ん中にはお菓子が置かれ、つまみながら意見交換が進む。ときどき笑いもおこり、和やかに議論が行われた。



我々学生は話し合いに参加しながら、議論が円滑に進み、参加者が議論の状況を常に把握できるように、参加者の意見をポストイットに書き出し、議事録をとるなどの役割を担った。普段は学生の自分にとってこのように地域に方々の生の声を聴く機会は初めてであり、地域を何とかして良くしたい、変えたい方々の真剣な議論は非常に刺激的であった。

今回の「西地区フォーラム」の試みは地域の問題を明確にするということが一義的な目的であったが、この「西地区フォーラム」の場が、将来的には西地区地域の問題解決の糸口が生まれるひとつの場所となる可能性を感じた。

ちなみに、この西地区フォーラムをきっかけに、「西地区地域協働戦略会議」が設置された。戦略会議は西地区のさまざまな団体、個人が定期的に集まって、これからの西地区のコミュニケーションを継続的に考え、議論する場となっている。



かわぐちの染織デザイン

西染色工房を訪ねて

早田 宰（早稲田大学 教授）

かつて川口は木綿織の生産地として発展し、機織りのガチャコンというにぎやかな音が、田んぼに響いていた。関連産業である染も栄えた。明治31年には「横曽根村織物組合」が尾熊伊兵衛を発起人に設立された。大正には最盛期を迎えたが、昭和30年代に織物業は不振におちいり、他産業へ転換していった。

蕨宿双子織復興会」が組織され双子織の復興の努力を始めている。

各地で染織の復活熱が高まっている。埼玉県内でも、2007年に「埼玉織物サミット」が川越で開催された。蕨では「中仙道

川口の染織は、東京という一大消費地を控えて、早くから各地の最新の素材の肌触りの感覚や人気のデザインを取り入れ質の高い多様な展開をしていた。歴史の中で培われたデザインを現代の暮らしやプロダクトデザインに活かしたい。

2011年1月29日、「川口の染・そめもの文化 西染色工房を訪ねる」という企画を開催した。



西川口西口夏祭り

真夏の西川口に一夜限りの
まちなかピアガーデンが出現

加藤 祐樹（早稲田大学 社会科学部）

7月31日「西川口西口夏祭り」が開催された。川口西地区連合商店会がイベントを主催し、商店会をはじめ、町会の人々がスタッフとして参加、協力している。私たち学生もスタッフとして参加させていただいた。

会場は西川口駅から歩いてすぐの街路上。屋台ではビールとポテトなどのつまみが売られ、会場には「夏」らしく色鮮やかなパランソルの下にイスとテーブルが置かれて、

お客さんはそこに各々座り飲食できるようになっていた。

「いらっしやい！いらっしやい！」地元の人々や学生たちのエネルギーあふれた声が鳴り響き、お客さんも途切れることがない。地元の女子プロレス団体や音楽教室の方々にも協力いただいてパフォーマンスを行い、人々を楽しませた。

まちなかの非日常の開放的な雰囲気の間、会場の人々は楽しんでいるようであった。ビ-

先生のアトリエには膨大な江戸型染のコレクションがある。繊細さに参加者からため息が漏れる。「みな手彫りです」。西先生は笑う。「宮代には熱心なグループがいて教えるため通っています」「川口も工芸はじめて誇れる文化がある。地域の資源をもっと活かさない」と。

そこで西先生の染織デザインのファイルを作成することにした。希望者はコ・ラボ西川口へ。



右 染織家の西耕三郎さん
左 デザインしたクリアファイル

ルを飲みつつ、プロレス観戦や音楽鑑賞を楽しんだり、ビールを飲んで涼んだり、恋人同士で語ったり、友達同士でワイワイしたり、家族でまったりと過ごしたり、日ごろの仕事での愚痴をこぼしたり、それぞれ楽しみ方は様々だが、みなで同じ開放感を共有しつつ、どの席にも充実感や満足感が満ちていた。

お客さんはもちろん、スタッフや学生みなが交流を深め楽しみ、夏祭りは大変盛り上がった。西川口が活気と元気にあふれた真夏の夜であった。



いつもは少し暗い路地にも西川口の住民が集まり、祭りの活気にあふれた。



川口B級グルメ大会開催

チャンピオンを決める大会は
今年も大盛況！

西川口ストーリー 編集部

西川口に定着しつつあるB級グルメ。そのチャンピオンを決める川口B級グルメ大会が今年も11月末の日曜日に開催された。今年も西口だけでなく、東口でも「世界のグルメ大会」が開催され、西川口はグルメ一色になった。

西口では早朝から準備が始まる。この日はやはり地元商店会や町会の方々も大会スタッフとして参加する。まさにオール西川口である。さらに大学生も運営スタッフに

参加して地元の方々には混じり大会を支える。10時の開会式スタートを前にして、早くも行列がではじめ、「販売開始！」のアナウンスとともに、B級グルメを手にした来場者がまちの中に溢れた。

東西あわせて5万人を超える人が来場したが、昨年までの経験が生かされて混乱がほとんどなかったようだ。

各店舗昨年よりも販売数を大きく増やしたそうだが、それでもお昼を過ぎると徐々に

に完売のところが出はじめる。大会が終わるころには、ほとんどの店で完売していた。今年優勝したのは、「異味香」が販売した黒豚焼きシューマイ。5月に開催される「埼玉B級ご当地グルメ王決定戦」への参戦が決定した。昨年優勝の「蕎麦の澤」のわらび餅は惜しくも準優勝。3位には「チーム黒潮」の芋の（铸件）まんじゅうが入った。定着しつつあるこのグルメ大会から次はどんなグルメが登場するのか、今後の展開が楽しみである。



今年も15店舗・団体が参加して、それぞれオリジナルのBグルメを出品、味を競った。



コミュニティ・サポート・ スチューデントズ結成

自ら育つ学生のネットワーク

西川口ストーリー 編集部

コミュニティ・サポート・スチューデントズ（CSS）は、早稲田大学（早田幸）、明治大学（大畑裕嗣）、跡見学園女子大学（石渡尚子）、大東文化大学（齋藤博）の4研究室の学生が中心となって立ち上げた「コミュニティを支援しながら専門を学ぶ大学のネットワーク組織」である。大学や専門分野の垣根を越えて学生主体で活動し、地域社会を支援する活動、参加型学習、社会実験、アクションリサーチを推進する緩やかな組織である。

CSSでは「自ら育つ」新しい社会の仕組みをつくるため、学生が教室を出て現実社会と関わり、主体的に学び、研究できるネットワークを目指している。地域や世代、学問分野など多様なコミュニティを超えて相互にサポートしながら、切磋琢磨する環境やチャレンジする機会、自己成長する機会、さらには教員や大学の外から社会的評価を受ける場をつくらうと考えている。

2010年の川口B級グルメ大会にはCSSの4大学が参加した。早大の学生はコ・

ラボ西川口と武州ムギ坊を販売し、跡見大の学生グループは「ATOMI団子」を開発販売した。おいしさに加えて栄養のバランスやコストも考えた。明治大と大東文化大の学生は本部スタッフとして大会運営をサポートした。

CSSはまだ立ち上げたばかり。連携しながらも今後も活動を続けてゆく。



B級グルメ大会に参加した4大学の学生の集合写真。これからも幅広いネットワークを超えた活動を継続する予定。



彩の国黒豚／ 彩の国地鶏タマシャモ グルメラリー

西川口ストーリー 編集部

2010年5月、西川口西口南通り会の主催で「彩の国黒豚グルメラリー」が開催された。8店舗が参加したこの企画では、1店舗1000円程度で、埼玉県特産の黒豚をつかったおいしい料理とお酒がセットで楽しめる。1店舗行くことに1ポイントもらえ、3ポイント集めると温泉旅行や無料ドリンク券などが抽選で当たる。

2月から始まった「地域資源活用研究会」では、地域商店有志と大学が、地域特産物

をつかった逸品と魅力的な飲食店街づくりを目指して、議論と試行錯誤を重ねた。その結果、埼玉県産彩の国黒豚と新潟県七日町で行われているドリンクテレーリングに注目し、このグルメラリーが企画された。

参加する店舗はそれぞれ黒豚を使った料理を一品開発し、その料理にあうお酒とセットで提供する。参加店舗同士が競い合って開発したメニューを、各店舗入りやすい金額で提供、複数店舗を回ってもらえるよう



黒豚グルメラリーで提供されたグルメ



西川口発！焼焼売！ 焼きシューマイの「異味香」の 山田慶忠氏にお話を伺った。

野口 琢生（早稲田大学 大学院）

川口B級グルメ大会で優勝した「黒豚焼きシューマイ」。この焼きシューマイを出品した「異味香」の山田慶忠氏にお話を伺った。

この焼きシューマイをつくるきっかけとなったのは、10年2月から始まった地域資源活用研究会。地元有志と新しい逸品を研究する中、山田氏は埼玉県の「彩の国黒豚」を使って点心で何かつくれないかと考えて、シューマイをつくった。しかし、蒸すだけでは他店にもありインパクトが薄いので、工夫して試しに焼いてみることにした。すると蒸したときよりも黒豚の香ばしさと

皮のパリパリとした食感が際立ち非常においしかった。

そこで、西川口の5月〜6月の黒豚グルメラリーで異味香から出品したところ好評を得た。さらに11月のB級グルメ大会に出品して、見事優勝を果たした。

ちなみにこの焼きシューマイ、日本はもちろん、本場の中国にも存在しない、異味香の完全なオリジナルとのこと。

いま山田氏は、西川口を「焼きシューマイの街」にできないかと考えているそうだ。「にしかわぐち焼焼売を焼く会」を設立し、

地元有志と議論を始めている。また、西川口の飲食店に各店舗オリジナルの焼焼売をつくってもらおうよう声をかけており、すでに11店舗が応じてくれている。「西川口の焼焼売」は、シューマイの皮に具材を包んで焼いてあげばよく、具材は各店舗の創意工夫でアレンジを加えたものが提供されるようだ。さらに「焼焼売マップ」や「焼焼売の日」などをつくって、「西川口に降りたら焼焼売！と思えるようなまち」にできれば、と語っている。

こうした多くの飲食店の創意工夫によって西川口に新たな名物が誕生しようとしている。



2010年11月の川口B級グルメ大会で優勝を果たし、表彰される山田慶忠氏。



復活!! 懐かしの餃子ドッグ

懐かしの西川口B級グルメが
この夏復活をとげた!

野口 琢生 (早稲田大学 大学院)

見た目にはパンに餃子をはさんだだけのいかにも簡単なメニューだが、吉田さんによれば独自に試行錯誤を重ねて、いろいろ工夫を凝らしていたらしい。例えば水っぽくなりがちなキャベツはマヨネーズで和えてあり、餃子は端まで具が入るように配置。餃子は一度蒸したものを揚げることで揚げすぎて黒っぽくならないようにしていたとか。なるほど、奥が深い。

西川口にも、まだまだ知らないB級グルメがあるかもしれない。さて、次に復活するのはどんな食べ物なのだろうか。

いまでもこそB級グルメのまちとして知られるようになった西川口。しかしB級グルメの歴史は最近ではまったわけではない。探してみると、すでに忘れられかけた様々なB級グルメがかつて存在したようだ。現在コ・ラボ西川口のある場所にかつてあったクインベーカーリーというパン屋さん。ここで売られていたオリジナルB級グルメ「餃子ドッグ」は人気の商品の1つだったと

か。2010年夏、西川口のイングリッシュバー「CASK AND STILL」のマスターが、ふとこの懐かしのB級を思い出して話したことが復活のきっかけになった。さっそくクインベーカーリーのご主人吉田さんにレシピを聞き再現して、コンビニエンスストア・コスモスで販売することになった。(期間限定/すでに販売終了)



クインベーカーリーの元オーナー吉田さん(右)と、コンビニエンスストアコスモス西川口店の岡田さん(左)



グローバル弁当お披露目会

～「食」という過程を共有する～

石塚 高秋 (早稲田大学)

の可能性を示した。何か新しいものを実際に作り、皆で囲んで食べる、共有するという過程そのものの重要性。それも普段ちよつと顔を合わせないような人とやることで参加者自身が新しい何かに気付く。世界が広がる。だからこそグローバルに西川口の「食」の可能性を広げていく。そういう過程を積み重ねることにまちづくりの本来の喜びと意義がある。実際にお披露目会に参加した人もお弁当の新鮮さ美味しさだけでなく普段とは異なる過程を通して「食」を共有する楽しさを感じていたようであった。

昨年5月某日、コ・ラボ西川口にて2009年度の事業報告会が行われた。まちづくり社会実験拠点コ・ラボ西川口の活動、約半年の間に行われた「商店街大学協働連携構築事業内容」の説明、またその成果であるまちづくりの「小さな芽」を共有し、今後の活動へ向けた理解を得る場として、多くの地元関係者の方に参加いただいた。

ル弁当」を参加者全員で試食できたこととはりわけ大きな一歩であった。今年の2月に西川口まちづくり懇談会でビジョン作成のワークショップが行われた際も「食」というテーマが参加者の間で高い関心にあつたように、「食」は西川口のまちづくりにとってもはや欠かせないものである。にもかかわらず西川口にとって「食」とは何なのかを共有できる場所はとも少ないのが現状だ。この点でグローバル弁当の試食会は一つ



グローバル弁当をつくったコスモス西川口店の岡田静夫さんと、アドバイスをいただいた料理研究家の根本美保さん。



仁志二町会餅つき大会

地元町会の年中行事に学生が参加

末永 太一（早稲田大学 社会科学部）

去年の12月に西川口の公園で仁志2町会のもちつき大会が行われた。私も早田ゼミの一人として参加させていだいた。

寒い中でも早朝から西川口で暮らす皆さんの方々が公園に集まり、とても活気が感じられた。テントなどの準備をしてから、火をおこしてもち米を蒸し、その餅をどんどんついていく。年配の方のつき方には安定感があり学生のそれとは音が違う。途中

からは地域の子どもも集まり、大人に教えてもらいながらお餅をついていった。ついたお餅はすぐに調理されて参加者にどんどん配られていく。

参加してみても思ったことは、まず地域のみなさんとはとても温かく、そして元気だということである。初めて参加する私たち学生でも、お餅をつかせていただいたり、お雑煮をいただいたり、西川口のお話を聞か



どの学生もお餅をつくのがほとんど初めてだったので、町会の方々に丁寧に指導していただいた。



新春餃子パーティー

西川口で祝う中国の春節

西川口ストーリー 編集部

2月5日、コ・ラボ西川口で旧正月を祝う春節餃子パーティーが行われた。西地域協働戦略会議主催で、国際交流と在住外国人支援を目的に企画された。

中国の北部では春節に家族そろって餃子をつくり食べて祝う習慣がある。日本で暮らす中国人にはこの時期に一度国に帰る方もいるが、留学や仕事の関係で、日本で祝う方も多いようだ。

春節餃子パーティーには、日本人と中国人あわせて20名が集まった。日本で春節を

迎えた川口市在住で国際交流員の晏晴さんをはじめ、中国の方々に餃子のつくり方を教えていただいて、日本人と中国人がいっしょになって、皮から1つ1つ餃子をつくっていた。中国の方の餃子をつくる手つきはさすがに素早く正確だ。餃子は焼くのではなく、中国流にゆでていく。ちなみに中国では餃子は主食で、食べかりの若者と数十個食べるので、いつもたくさんつく

るのだとか。餃子づくりが一段落した頃、120イン

チのスクリーンに北京で暮らす晏さんの友人が登場。Skypeのテレビ電話で北京と接続したのだ。水餃子を口に運びながら、晏さんに通訳をお願いして海を越えた会話を楽しむ。お互いの顔を見ながら、中国の春節の祝い方や餃子の食べ方など質問したり、春節祝いの飾り物を見せていただいたりした。

日本で暮らす外国人がどんどん増えていく。多文化共生はなかなか難しい問題であるが、こうした交流によってお互いの暮らしや文化を知ることから、少しずつ始めることが重要であろうと思った。

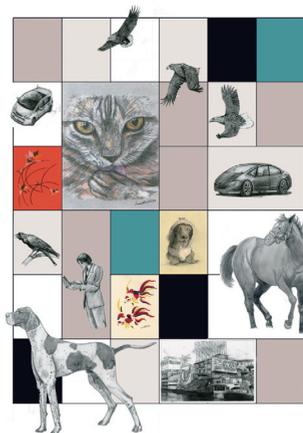


餃子を食べながら、北京とテレビ電話で会話。

イラストレーター

アイ・メージ

山川賢一郎×もろがまさし



小冊子や広告イラストカット、人物・ペットの似顔絵、肖像画などをコンビで描いている。

山川は「絵が苦手な人のための絵画教室」を、富士通オープンカレッジとコ・ラボ西川口にて開催中。(月1回/第2日曜日 14:00～16:00) 詳細は山川(090-9480-2754)まで。

出張絵画教室なども承っています。

西川口ストーリー ver. 2

2011年2月28日 発行

企画・編集 コ・ラボ西川口
<http://www.colabnishikawaguchi.jp/>
西川口まちづくり合同会社
<http://nishikawaguchi-llc.jp/>

CO-LAB.
Nishikawaguchi

Nishikawaguchi LLC
西川口まちづくり合同会社

埼玉県川口市西川口1丁目29-1

あとがき

本小冊子は以下の補助金を活用しています。

平成22年度 長期優良住宅等推進環境整備事業

(住まい・まちづくり担い手支援機構)

活動名：ポスト性風俗の「住めるまち」をめざした

住まい安心おとどけ隊

(申請主体)

西川口まちづくり合同会社

(目的)

川口市西川口駅西口周辺地域は、かつての違法性風俗店街の一斉摘発後もその負のイメージを回復できておらず、居住者の高齢化、独居化、住宅の空家、空店舗、空ビルが深刻化しており、地域像の再構築、居住地の回復、生活の質の向上等が課題となっている。商店街の空き店舗(コ・ラボ西川口)を活動拠点として、地域住民、専門家グループ、NPO、行政、大学の協働による住まい・まちづくりの推進体制を整備し、建物所有者の改修ニーズの把握と改修の担い手の育成を図り、両者のマッチングにより、居住再利用建物(空き家となった木造・非木造の賃貸共同住宅及び用途転換可能な倉庫・雑居ビル)の改修・改築を進め、支えあい住めるまちづくりの実現を目指す。

(期間)

2010年10月～2011年2月

(実施した具体的な事業内容)

1. 住まいの仕事塾(座学と事前工事研修)
2. 空き家・空ビル等、居住用建物の実態調査
3. 塾生による居住再利用建物の改修・改築
4. 小冊子「西川口ストーリー」作成・配布

西川口ストーリー

Nishikawaguchi Story

ver. **2**
